

バッハからの贈り物

～珠玉のカンタータ～

Vol.2

2013.1.13
盛岡市民文化ホール

ご 挨拶

盛岡バッハ・カンタータ・フェライン
代表 茂 木 容 子

会場の皆様、お寒い中、「バッハからの贈り物 ～ 珠玉のカンタータ Vol.2 ～」にご来場いただきありがとうございます。会員一同心より御礼申し上げます。

本日は、器楽にバッハのスペシャリスト(にとどまらず、日本を代表する演奏家の方々)である東京バッハ・カンタータ・アンサンブルをお迎えし、会員がつとめます声楽ソロ、精進を重ねてまいりました合唱が、佐々木正利の指揮でバッハのカンタータを演奏いたします。

36 年前、佐々木正利先生を指導者にお迎えし、二十数名でバッハのカンタータを歌おうと立ち上げられた盛岡バッハ・カンタータ・フェラインですが、本日は 92 名がステージに立ちます。客席からご覧になって一目瞭然とは思いますが、まさに老若男女、年齢も職業もさまざまです。見た目ではお分かりにならないかもしれませんが、音楽を専門に勉強している方、合唱を趣味としている方、合唱を始めて間もない方、楽譜の読めない方、盛岡在住の方、県内、東北、関東から参加している方、在籍数か月の方、36 年間ここで歌っている方が、と本当にさまざまなメンバーで構成されている合唱団なのです。

では、メンバーの共通項は何でしょうか？

私は音楽、合唱、バッハ、カンタータへの「愛」だと思っています。

毎回の練習では、佐々木先生が未熟な私たちに、この「愛」をも伝授くださっているのです。36 年間、メンバーが入れ替わっても変わらず、育まれ、受け継がれてきた大切なものです。

そして、バッハ演奏の巨匠である H. ヴィンシャーマンは、私たちを指揮してくださるために盛岡を訪れるたびに、「ただいま！盛岡」とおっしゃり、私たちには、「皆は家族。おとうさんは佐々木、おじいちゃん私は私、皆は子供たち」と身に余る言葉をくださいました。それも、この「愛」を感じてくださったゆえのことと思います。私にとっては何よりもうれしい言葉でした。

本日は、会場の皆様に「愛」が届きますよう、心を込め、音楽に誠実に演奏したいと思います。寒い季節の午後のひと時、珠玉のカンタータでお楽しみいただければ幸いに存じます。

最後に今年こそ、皆様にとりまして幸多き 1 年になりますように！！、と心よりお祈り申し上げます。

バッハからの贈り物 ～珠玉のカンタータ Vol.2～

J.S.バッハ カンタータ第4番「キリストは死の縛めに捕われました」
J.S.Bach „Christ lag in Todesbanden“ BWV4

カンタータ第93番「ただ愛する神の支配にまかせる人」
„Wer nur den lieben Gott läßt walten“ BWV93

カンタータ第161番「来てください、甘美な死の時よ」
„Komm, du süße Todesstunde“ BWV161

カンタータ第102番「主よ、あなたの目は信仰を顧みます!」
„Herr, deine Augen sehen nach dem Glauben!“ BWV102

ソプラノ	赤塚 温子	阿久津 巴	金成 佳枝	
アルト	柿崎 泉	新宮 央子	田口千紗都	多田 繭子
テノール	伊藤 陽平	鏡 貴之	西野 真史	沼田 臣矢
バス	小原 一穂	千田 敬之	松田 亜蘭	
合唱	盛岡バッハ・カンタータ・フェライン			
管弦楽	東京バッハ・カンタータ・アンサンブル			
	(コンサートマスター: 蒲生克郷)			
指揮	佐々木正利			

2013年1月13日(日)15:00
盛岡市民文化ホール(マリオス)大ホール

主催 盛岡バッハ・カンタータ・フェライン

後援 岩手県教育委員会 盛岡市教育委員会 盛岡市文化振興事業団
岩手県合唱連盟 岩手日独協会

— 演 奏 曲 目 —

1. カンタータ第4番「キリストは死の縛めに捕われました」

„Christ lag in Todesbanden“ BWV4

《復活祭第1日目のためのカンタータ》

1. シンフォニア
2. 第1節（合唱）
3. 第2節（ソプラノとアルトパートによる合唱）
4. 第3節（テノールパートによる合唱）
5. 第4節（合唱）
6. 第5節（バス） 独唱：松田 亜蘭（バス）
7. 第6節（ソプラノとテノール） 重唱：阿久津 巴（ソプラノ）
伊藤 陽平（テノール）
8. 第7節（合唱）

2. カンタータ第93番「ただ愛する神の支配にまかせる人」

„Wer nur den lieben Gott läßt walten“ BWV93

《三位一体の祝日後第5日曜日のためのカンタータ》

1. 合唱
2. コラールとレツィタティーフ（バス） 独唱：小原 一穂（バス）
3. アリア（テノール） 独唱：鏡 貴之（テノール）
4. アリア（ソプラノとアルトの二重唱） 重唱：赤塚 温子（ソプラノ）
田口千紗都（アルト）
5. コラールとレツィタティーフ（テノール） 独唱：鏡 貴之（テノール）
6. アリア（ソプラノ） 独唱：金成 佳枝（ソプラノ）
7. コラール（合唱）

～～ 休 憩（20分） ～～

3. カンタータ第161番「来てください、甘美な死の時よ」

„Komm, du süße Todesstunde“ BWV161

《三位一体の祝日後第16日曜日のためのカンタータ》

- | | |
|--------------------|-----------------|
| 1. アリア (アルト) とコラール | 独唱：柿崎 泉 (アルト) |
| 2. レツィタティーフ (テノール) | 独唱：沼田 臣矢 (テノール) |
| 3. アリア (テノール) | 独唱：沼田 臣矢 (テノール) |
| 4. レツィタティーフ (アルト) | 独唱：柿崎 泉 (アルト) |
| 5. 合唱 | |
| 6. コラール | |

4. カンタータ第102番「主よ、あなたの目は信仰を顧みます!」

„Herr, deine Augen sehen nach dem Glauben!“ BWV102

《三位一体の祝日後第10日曜日のためのカンタータ》

- | | | |
|----|-------------------|-----------------|
| 一部 | 1. 合唱 | |
| | 2. レツィタティーフ (バス) | 独唱：千田 敬之 (バス) |
| | 3. アリア (アルト) | 独唱：多田 繭子 (アルト) |
| | 4. アリオージョ (バス) | 独唱：千田 敬之 (バス) |
| 二部 | 5. アリア (テノール) | 独唱：西野 真史 (テノール) |
| | 6. レツィタティーフ (アルト) | 独唱：新宮 央子 (アルト) |
| | 7. コラール (合唱) | |

東京バッハ・カンタータ・アンサンブル (コンサートマスター：蒲生克郷) のメンバー

第一ヴァイオリン	蒲生 克郷	海保あけみ	花崎 淳生	長岡 聡季
第二ヴァイオリン	川原 千真	大谷美佐子	高木 聡	
ヴィオラ	李 善銘	鈴木友紀子		
チェロ	田崎 瑞博	伊藤恵以子		
コントラバス	蓮池 仁			
フルート	阿部 博光	丹野恵美子		
オーボエ	小畑 善昭	戸田 智子		
ファゴット	寺下 徹			
オルガン	能登伊津子			

佐々木 正利 (指揮)

東京藝術大学声楽科卒業。同大学院修士及び博士後期課程修了。須賀靖元 (声楽)、服部幸三 (音楽学)、小林道夫 (演奏法)、森晶彦 (発声法)、松本民之助 (作曲)、岳藤豪希 (宗教音楽) の各氏に師事。

1973年にバッハ「クリスマス・オラトリオ」の福音史家で楽壇デビューして以来、バッハをはじめとする宗教音楽のスペシャリストとして揺るがない地位を得ている。1979年シュトゥットガルトに渡りL. フィッシャー教授に師事。1980年第6回ライプツィヒ国際バッハコンクール声楽部門第5位入賞。同年より1982年までデットモルト北西ドイツ音楽大学に学び、H. クレッチマル教授に師事。在独中は欧州各国の演奏会に招かれ、特に1980年ウィーン楽友協会ホールでのマタイ受難曲では『若き日のP. シュライヤー』と新聞各紙で絶賛される。

帰国後もライプツィヒ・ゲヴァントハウス管弦楽団、ベルリン交響楽団、国立ブカレスト交響楽団、NHK交響楽団等、世界、日本の著名なオーケストラのソリストとして度々起用され、K. マズア、H. シュタイン、H. ブロムシュテット、小澤征爾、R. シャイー等、世界を代表する数々の指揮者と共演。また宗教音楽の名指揮者として名高いH. リリング、H. J. ロッチュ、M. コルボ、R. ヤコブス等率いる、シュトゥットガルト・バッハ合奏団、ゲヒンゲン聖歌隊、聖トマス教会聖歌隊、R I A S室内合唱団等の演奏会に度々出演し、高い評価を得ている。特に世界的バッハ指揮者H. ヴィンシャーマン率いるドイツ・バッハゾリステンの演奏会には、ソリストとしてだけでなく自身が育てた合唱団も度々共演し、その歌唱力、合唱指導力によって絶大な信頼を勝ち得ている。

1975年、1985年ザルツブルク音楽祭に招聘され、モーツァルト管弦楽団、ベルリン聖ヘドヴィッヒ聖歌隊と、バッハ「マニフィカート」、モーツァルト「戴冠ミサ」を共演し好評を博した。在独中オペラでは、ヴェストファーレン州立歌劇場等で、「コジ・ファン・トゥッテ」のフェランド、「フィデリオ」のヤッキーノ、スカララッティ「グリゼルダ」のコッラード役で出演。現在までリサイタル29回を数え、レコード・CDも多数リリース、またテレビ、FM等にも度々出演している。

1970年東京藝術大学バッハカンタータクラブの創設に携わり、多くの後進を育てると共に指揮者としての活動を開始。以後約40年に亘って主に宗教曲の演奏に力をみせ、そのいずれもが名演の誉れ高い。特に盛岡バッハ・カンタータ・フェライン、仙台宗教音楽合唱団、岡山バッハカンタータ協会等を率いての20数回に亘るヨーロッパ公演では、『シュッツ、バッハの世界的担い手』とした最大級の賛辞が新聞各紙に掲載され、1993年のヴィンシャーマンとのマタイ受難曲では『マタイ演奏史上、最も特筆されるべき演奏の一つ』、また1995年のJ. ツィルヒ指揮ニュルンベルク交響楽団との天地創造では『音楽と言葉との見事なまでの融合』と、その音楽作りが絶賛された。

1987、88年には、リリング音楽監督のバッハ・アカデミーにてTen. マスタークラスの講師を務め、またコダーイ・サマースクールや古楽サマースクール等でも指導講師に招かれるなど、その指導力については世界的に定評がある。門下生として世界の歌劇場で活躍する国際的歌手、オラトリオ・リート歌手、大学教授等音楽指導者を多数輩出しており、またコンクール優勝者等も数多い。

1994年長年にわたる顕著な演奏・教育の業績に対し、第47回岩手日報文化賞 (学芸部門) が贈られ、また2000年にはアメリカ・イオンド大学より名誉博士号が授与された。さらに2011年には日独交流150周年を記念して、ドイツ大使館より日独友好賞 (功労賞) を受賞した。

現在岩手大学教育学部教授。二期会会員。日本声楽発声学会副理事長、日本音楽表現学会会長諮問委員、仙台バッハ・アカデミー理事。盛岡バッハ・カンタータ・フェライン指揮者。仙台宗教音楽合唱団、岡山バッハカンタータ協会、東北大学混声合唱団、東京21合唱団、岩手大学合唱団、各常任指揮者。山響アマデウス音楽監督。二期会バッハ・バロック研究会講師。



オーケストラメンバー・プロフィール



蒲生 克郷 (コンサートマスター、第一ヴァイオリン)

東京藝術大学卒業。1976~78 年渡独。ヒルデスハイム市立歌劇場奏者、ヒルデスハイム室内管弦楽団コンサートマスター等を務める傍ら、ヴェルツブルグ音楽大学にて研鑽を積む。現在、東京藝術大学音楽学部非常勤講師、及び藝大フィルハーモニア(管弦楽研究部)コンサートマスター。エルデーディ弦楽四重奏団、アンサンブル of トウキョウ各メンバー。故多久興、海野義雄、故ボリス・ゴールドシュタインの各氏に師事。



海保 あけみ (第一ヴァイオリン)

東京藝術大学音楽学部卒業。ヴァイオリンを片岡世界、正岡紘子、山岡耕祐、日高毅各氏に、室内楽を黒沼俊夫、日高毅各氏に師事。藝大バッハカンタータクラブにて小林道夫氏の指導を受ける。現在フリーの演奏家として、バロック時代の器楽曲、宗教曲等の演奏を続ける傍ら、オーケストラや室内楽の分野でも活動している。シンフォニア・フォンス・アルモニエのメンバー。尚美学園大学管弦楽団演奏員。



花崎 淳生 (第一ヴァイオリン)

東京藝術大学を経て同大学院修了。1986 年から 87 年にかけて、ドイツ、カールスルーエに留学。'97 年度「村松賞」、平成 16 年度文化庁芸術祭賞、平成 19 年度文化庁芸術祭優秀賞を古典四重奏団として受賞。現在、「エルデーディ弦楽四重奏団」「古典四重奏団」「アンサンブル BWV 2001」メンバー。エルデーディ弦楽四重奏団よりハイドン等の CD を、古典四重奏団よりバッハ、モーツァルト、ベートーヴェン、バルトーク等の CD をリリース。井上武雄、日高毅、J. W. ヤーンの各氏に師事。



長岡 聡季 (第一ヴァイオリン)

東京藝術大学大学院室内楽科博士後期課程修了。シューベルトの室内楽曲の研究により、同大学室内楽科初の博士号(音楽)取得。現在、横浜シンフォニエッタコンサートマスター、神奈川フィルハーモニー管弦楽団、神戸市室内合奏団他、各地のオーケストラにてゲスト・コンサートマスターを務

めている。東京藝術大学室内楽科非常勤講師として、後進の指導にもあたっている。



川原 千真 (第二ヴァイオリン)

東京藝術大学および同大学院修了。ヴァイオリンを海野義雄、田中千香士、ヴィオラ・ダ・ガンバを平尾雅子に師事。2000、04 年、ピリオド楽器によるバッハ無伴奏ソナタ・パルティータ全曲演奏会を開催、09 年同全曲 CD 2 枚組リリース(「レコード芸術」特選盤)。「古典四重奏団」第 1 ヴァイオリンとして、97 年度村松賞、04 年文化庁芸術祭大賞受賞、07 年文化庁芸術祭受賞。99 年ギリシャ公演、05 年ドイツ公演。ラ・フォル・ジュルネ、NHK-FM リサイタル等出演。CD 11 枚リリース。「音楽三昧」のヴァイオリンおよびヴィオラ・ダ・ガンバ奏者として CD 7 枚リリース、02 年アメリカ公演、NHK「名曲アルバム」等出演、第 7 回「サライ大賞」CD・DVD 部門賞受賞。アンサンブル《BWV 2001》メンバー。



大谷 美佐子 (第二ヴァイオリン)

東京藝術大学卒業。1989 年 IMAS 交響楽団と共演。1990 年ボストンでロマン・トーテンベルク、ペーター・ザゾフスキー各氏の指導を受け、ロンジ音楽院にてリサイタルを行う。1991 年第 105 回神奈川県立音楽堂推薦音楽会に出演。横浜・東京でリサイタルを行う。(故)井上武雄、浦川宜也、瀬川光子の各氏に師事。現在フリーの奏者としてソロ、室内楽など活動中。イリス弦楽四重奏団、アンサンブル VITA メンバー。

オーケストラメンバー・プロフィール



高木 聡 (第二ヴァイオリン)

東京藝術大学音楽学部卒業。これまでにヴァイオリンを小沢真琴、岡山潔、和波孝禧、塚原るりの各氏に、室内楽を小林道夫、金昌国の各氏に師事。1999年 The International Holland Music Sessions 修了。第九回全日本ソリストコンテストにてベストソリスト賞受賞。東京藝術大学管弦楽部非常勤講師を務めた後、現在は東京シティ・フィルハーモニック管弦楽団第一ヴァイオリン奏者。また、ソロ、室内楽、バロックヴァイオリン等多方面で活躍中。



李 善銘 (ヴィオラ)

東京藝術大学管弦楽研究部講師を長年務めたのち、1996年より名古屋フィルハーモニー交響楽団にてヴィオラの副首席奏者、退職した現在はフリーのヴィオラ奏者、指揮者として活動をしている。東京アカデミー室内合奏団、クロイツ弦楽四重奏団等を経て、現在東京バッハ・カンタータ・アンサンブルを主宰。2002年4月には神戸にて、小林道夫氏との共演でリサイタルを開催、好評を博した。ヴィオラを三輪長雄、故井上武雄、中塚良昭の諸氏に師事。



鈴木 友紀子 (ヴィオラ)

東京藝術大学器楽科 (ヴィオラ専攻) 卒業後、同大学院修士課程室内楽科修了。ヴィオラを菅沼準二、クロード・ルローン、川崎和憲の各氏に、室内楽を岡山潔、松原勝也、山崎伸子の各氏に師事。東京藝術大学バッハカンタータクラブにて小林道夫氏の指導のもと研鑽を積む。



田崎 瑞博 (チェロ)

東京藝術大学卒。ヴァイオリンを桑田晶、兎束龍夫、山岡耕作、外山滋に師事。在学中「東京藝大バッハカンタータクラブ」に所属、小林道夫の指導を受ける。その後、チェロや各種古楽器を独学し、室内楽を中心に幅広く活動を展開。「古典四重奏団」のチェロ奏者として、97年度村松賞・平成16年度

文化庁芸術祭大賞・同19年度優秀賞を各受賞、ギリシア・ドイツ公演、CD10枚をリリース。「タブラトゥーラ」のフィーデル奏者として、欧州、韓国、カナダなどで公演、CD8枚をリリース。アンサンブル「音楽三昧」の編曲者・ヴィオラ・チェロ奏者として、02年アメリカ公演、第7回「サライ大賞」CD、DVD部門賞受賞、CD7枚をリリース。バッハなどの宗教音楽の通奏低音奏者、アンサンブル《BWV201》では企画・制作とバロックチェロを担当。



伊藤 恵以子 (チェロ)

東京藝術大学卒、同大学院博士課程修了。チェロを三木敬之、R. フラシヨール、倉田澄子の各氏に師事。日本音楽コンクール入選。パリ・エコールノルマルで2年間学ぶ。芸大在学中バッハカンタータクラブに所属し、卒業後はフリーで様々な演奏活動を行う。ピアノカルテット Ensemble Delice, Fiore, Duo Piacere、ハープトリオなど室内楽にも力を入れている。訳書に「ポール・トルトゥリエ チェリストの肖像」「メニューインとの対話」がある。



蓮池 仁 (コントラバス)

東京藝術大学卒業。桑田文三、永島義男に師事。東京シティ・フィルハーモニック管弦楽団コントラバス奏者。アンサンブル「音楽三昧」《BWV201》メンバー。



阿部 博光 (フルート)

東京藝術大学卒業。元日本フィルハーモニー交響楽団首席フルート奏者。第45回日本音楽コンクールフルート部門入選。文化庁在外研修員として、スイス、バーゼル市に留学。ペーター・ルーカス＝グラーフ、レイモン・メラーンの両氏に師事。東京では10年連続リサイタルを開催。1999年より札幌コンサートホールにて阿部博光室内楽シリーズ、リサイタルシリーズを開催。CD「バロック21」「笛

オーケストラメンバー・プロフィール

楽「フルート&ピアノデュオリサイタル」をリリース。札幌市民芸術祭大賞、札幌文化奨励賞受賞。小松昭五、細川順三、三村園子、故小泉剛、故吉田雅夫の各氏に師事。現在、北海道教育大学岩見沢校教授、札幌大谷大学非常勤講師、HBCジュニアオーケストラ常任指揮者。札幌フルート協会副会長。アジアフルート連盟理事。



丹野 恵美子 (フルート)

1983年生まれ。北海道苫小牧東高校、東京藝術大学卒業。フルートを箕輪早智子、阿部博光、金昌国、細川順三、浅生典子、木ノ脇道元、中野富雄の各氏に師事。第2回全日本ジュニア管打楽器ソロコンテスト第1位。大学在学中より作曲家の新曲初演、レコーディング、韓国と中国の作曲家の新曲初演や、ツアーに参加。詩と音楽のコラボレーショングループ、VOICESPACEのメンバーとして小室等、谷川俊太郎と共演。イベントやライブ時の演奏、アレンジ、作曲、譜面制作も行う。



小畑 善昭 (オーボエ)

東京藝術大学卒業、同大学院修了。第42回毎日音楽コンクール管弦楽部門第3位入賞。1979年より1982年まで東京交響楽団に在籍。のち、1985年まで西ベルリン留学。この間ベルリン・フィルハーモニー交響楽団のエキストラを務める。帰国後、新日本フィルハーモニー交響楽団首席オーボエ奏者を経て、現在母校の教授として後進の指導に当たるかわら、独奏及び室内楽、また古楽器奏者としても活発な演奏活動を繰り広げている。



戸田 智子 (オーボエ)

現在、東京藝術大学大学院音楽研究科修士課程一年に在籍。1987年岩手県花巻市生まれ。12歳よりオーボエを始める。盛岡白百合学園高校を経て弘前大学教育学部を卒業。第18回日本クラシック音楽コンクール全国大会木管部門大学生の部第二位(最高位)。第28回日本管打楽器コンクールオーボエ部門

入選。これまでにオーボエを鈴木繁、小畑善昭、和久井仁、池田昭子の各氏に師事。上野チャルメーラメンバー



寺下 徹 (ファゴット)

立教大学文学部卒業後、東京藝術大学を経て、ミュンヘン音楽大学に留学。音楽学を皆川達夫、指揮法を伴有雄、石丸寛、ファゴットを菅原暁、三田平八郎、クラウス・トゥーネマン、カール・コルビンガーの各氏に、室内楽をゲルノット・シュマールフス、ゲルト・シュタルケの各氏に学ぶ。在独中は、ミュンヘンの放送、歌劇場などのオーケストラに客演。また、ミュンヘン・バッハ合奏団のメンバーとしてヨーロッパ各地を演奏旅行するなど幅広い経験を持つ。帰国後は指揮者・オーケストラ奏者としてのキャリアを積みながら、放送、リサイタル、ソリストとして多方面で活躍する傍ら、多くの学校から招かれ後進の指導に当たる。現在は、作詞・作曲の分野でも活躍しており、全国各地のアマチュアオーケストラ、吹奏楽団、合唱団の指導育成にも携わっている。京都在住。



能登 伊津子 (オルガン)

桐朋学園大学音楽学部ピアノ科卒業。グレゴリオ音楽院オルガン本科卒業、同専攻科卒業。オルガンを鈴木雅明、岩崎真実子の各氏に師事。1994年白川イタリアオルガン音楽アカデミーに於いてピストイア賞受賞。翌年イタリアピストイアオルガン音楽アカデミーに招待される。同アカデミーに於いてL.F.タリアヴィーニ、J.L.ウリオールの各氏に師事。1998年スペイン政府より奨学金を得てダローカ国際古楽セミナーに参加。現在、オルガン、チェンバロ、ルネッサンスハープ奏者として、数多くの演奏会、CD録音に参加している。メディオ・レジストロ、アンサンブル《BWV2001》メンバー。CD『メディオ・レジストロ』他多数リリース。

Photo 井村重人

東京バッハ・カンタータ・アンサンブル（管弦楽）

東京バッハ・カンタータ・アンサンブルは、東京藝術大学の学内サークルとして、永年小林道夫氏のもとで、活発な演奏活動を続けてきた芸大バッハ・カンタータ・クラブの器楽のOB、OGを中心に、卒業後もバッハを中心とした宗教作品を演奏して行こうと有志が集まって結成された。メンバーは各自それぞれがソリスト、室内楽、オーケストラ、大学講師等、各方面で活動している為、多少流動的だが、1977年にこの名前で活動をはじめてから既に30年以上を経ており、バッハやヘンデル等のバロックからハイドン、モーツァルトの古典派を経て、最近ではドヴォルザーク、ブラームス等のロマン派に至るまでレパートリーを広げている。その演奏はいずれもが様式感にととのいた生き生きとしたもので、共演した各合唱団や指揮者、ソリスト等から高い評価を得ている。

過去においては、W. ヤーコブ、H. ヴィンシャーマン、E. ヴァイアント、H. J. ロッチュ、P. ノイマン、小林道夫、黒岩英臣等、内外の演奏家との共演をはじめ、バッハ合唱団、CMA合唱団等、全国各地の合唱団と共演し、現在は年間おおよそ10～15回程度、日本全国各地の合唱団やソリストからの依頼を受けて共演している。



(2012. 2. 12 盛岡市民文化ホールでの演奏会)

盛岡バッハ・カンタータ・フェライン（合唱）

1977年「カンタータを歌う会」として発足。以来、一貫してJ. S. バッハの作品を中心としたドイツ・バロック合唱曲の研究、演奏を行っている。その演奏が、1991年ドイツにおいて「作品の語感、音、そして精神の完熟」という現地新聞の批評を受けるに至るまでには常任指揮者、佐々木正利のドイツ・バロック音楽に対する卓越した見識に基づく、熱意溢れる指導の積み重ねがあった。佐々木は超一流のエヴァンゲリストとして評価されるその発音、語感、様式感をもう一つのライフワークである合唱団の育成に注ぎ込み、その結果「言葉が生きる」とく音楽が生きる」とは歌の世界では同義語である」というフェラインの音楽信条が演奏上の身上となるに至ったのである。

その後、H. ヴィンシャーマン、H. J. ロッチュ、J. ツィルヒ、岩城宏之等、世界的指揮者との共演を重ね、各指揮者より、ドイツ・バロック音楽を音楽的かつ人間的に表現できる合唱団として、熱い評価を得るようになった。この評価は、声の充実を追求する合唱団や、古楽器的な歌唱法を駆使して鮮烈な表現を目指す合唱団に与えられるものとは性格を異にする。暖かい音色を基調としながら、音楽の刻々と変化する様相を、その時々に対応しいニュアンスで大胆かつ繊細に、確信を持って表現しきろうとする、あくまで人間バッハへの共感を基調とする合唱団に対してのものなのである。

ミュンヘンのヘラクレスザールでハイドンの「天地創造」を演奏する（ニュルンベルク交響楽団）同じ週に、各地教会でア・カペラの小品を歌う。フェラインは、常に盛岡の教会での練習で培ったトーンを原点として活動してきた。

1998年から2007年にかけてH. ヴィンシャーマン指揮の下、バッハの四大大宗教曲全てを演奏した。バッハのカンタータのみの演奏会は2008年6月以来4年半ぶり。合唱団主催としては、昨年6月「盛岡バッハ・カンタータ・フェライン35周年演奏会 ～イタリア・バロック音楽の煌めき～」以来の企画。今年夏には、有志によるドイツ演奏旅行を計画中である。



赤塚 温子 (ソプラノ)

盛岡市出身。盛岡二高、岩手大学教育学部卒業。声楽を佐々木まり子、佐々木正利の各氏に師事。現在、盛岡市立城西中学校教諭。盛岡バッハ・カンタータ・フェライン会員、ソプラノ・パートリーダー。



阿久津 巴 (ソプラノ)

秋田県秋田市出身。秋田北高、岩手大学教育学部卒業、同大学院修了。声楽を佐々木正利氏に師事。現在、岩手大学教育学部附属小学校講師。盛岡バッハ・カンタータ・フェライン会員、ソプラノ・パートリーダー。



金成 佳枝 (ソプラノ)

岩手県滝沢村出身。盛岡三高、岩手大学教育学部芸術文化過程音楽コース卒業。声楽を佐藤恵津子、佐々木正利、平松英子の各氏に師事。現在、東京藝術大学音楽学部声楽科在学中。盛岡バッハ・カンタータ・フェライン会員。東京21合唱団団員。



柿崎 泉 (アルト)

岩手県宮古市出身。弘前大学教育学部中学校教員養成課程音楽科卒業、岩手大学大学院教育学研究科教科教育専攻音楽教育専修修了。声楽を阿部亮子、渡辺一夫、小原一穂、佐々木まり子、佐々木正利の各氏に師事。第18回日本声楽コンクール入選。第20回大仙市大曲新人コンクール奨励賞受賞。第2回東京国際声楽コンクール一般部門第3位。これまでにヴィヴァルディ「グローリア」、モーツァルト「レクイエム」、ベートーヴェン「第九」等のアルトソロ

を務め、また2012年11月には山形交響楽団40周年記念定期演奏会、歌劇「さまよえるオランダ人（演奏会形式）」においてマリー役で出演し、脇役ながら存在感の強い演奏で高い評価を得た。2007年にはヘルムート・ヴィンシャーマン指揮による水戸室内管弦楽団の定期演奏会にて同団初のアンサンブルリストとして演奏、また世界的指揮者ヘルムート・リリングやペーター・シュライヤーのもと合唱団員として日本でのツアーで演奏するなど、ソロとしてだけでなく合唱にも力を入れ各地で積極的に演奏活動を行いながら、現在岩手大学教育学部音楽科非常勤講師として後進の育成にも携わっている。日本声楽発声学会会員、日本音楽表現学会会員、盛岡バッハ・カンタータ・フェライン、アルト・パートリーダー。



新宮 央子 (アルト)

青森県むつ市出身。田名部高校、岩手大学教育学部卒業。同大学院修了。声楽を佐々木正利、寺谷千枝子の各氏に師事。現在、東京藝術大学声楽科在学中。盛岡バッハ・カンタータ・フェライン会員。



田口 千紗都 (アルト)

盛岡市出身。盛岡四高、岩手大学教育学部卒業。同大学院修了。声楽を佐々木正利氏に師事。現在、宮古市立川井中学校教諭。盛岡バッハ・カンタータ・フェライン会員、アルト・パートリーダー。



多田 繭子 (アルト)

福島県本宮市出身。福島西高、岩手大学教育学部卒業。声楽を佐々木正利、伊原直子の各氏に師事。現在、岩手大学大学院在学中。盛岡バッハ・カンタータ・フェライン会員。



伊藤 陽平 (テノール)

岩手県一関市出身。一関一高、岩手大学教育学部卒業。声楽を佐々木正利氏に師事。現在、岩手大学大学院在学中。盛岡バッハ・カンタータ・フェライン会員、テノール・サブパートリーダー。



鏡 貴之 (テノール)

岩手大学教育学部芸術文化課程音楽コース卒業。東京藝術大学大学院音楽研究修士課程独唱専攻修了。声楽を佐々木まり子、佐々木正利、多田羅迪夫の各氏に師事。主にオラトリオ、宗教曲のソリストとして活動中。特にJ. S. バッハの作品では《クリスマス・オラトリオ》《ヨハネ受難曲》《ミサ曲短調》や多数の教会カンタータのソロを務め、活動の中心になっている。これまでにヘルムート・ヴィンシャーマン、ハンス・マルティン・シュナイト、鈴木雅明、ヴォルフ・ディーター・マウラーなどの著名な指揮者と共演して高い評価を得ている。また、2011年2月にはソロリサイタルでシューベルト《冬の旅》を歌い好評を博す。第4回東京国際声楽コンクール第1位、並びに審査員特別賞、東京新聞賞受賞。盛岡バッハ・カンタータ・フェライン、東京21合唱団、日本声楽発声学会、各会員。東京バッハ合唱団、東京ムジーククライス合唱団、各ヴォイストレーナー。バッハ・コレギウム・ジャパン、メンバー。



西野 真史 (テノール)

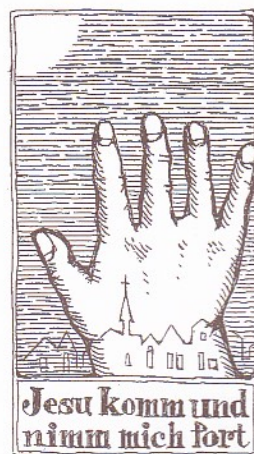
盛岡第一高等学校卒業。岩手大学教育学部芸術文化課程卒業。同大学院在学中。声楽を佐々木まり子、佐々木正利、多田羅迪夫の各氏に師事。2011年、宇石ベートーヴェン「第九」コンサートや、J. S. バッハなどのカンタータ、オラトリオのソロを務め

るP. シュライアー指揮バッハの「ヨハネ受難曲」のテノールソロでは指揮者より賛辞を贈られる。また、ここ数年間にわたるキャラホールのオペラ講座では、ビゼー「カルメン」のホセ、マスカーニ「カヴァレリア・ルスティカーナ」のトゥリッドゥ、プッチーニ、ヴェルディ、など様々な作曲家、言語、時代の主要な配役を実演でこなすレパートリーを増やしている。2012年石川啄木没後100年ブレ企画にて「初恋」など地元に縁ある演奏も行い、盛岡を中心とした活動を広げ、市内中・高生のヴォイストレーニングも行う。現在、盛岡大学、同短期大学部非常勤講師。日本声楽発声学会、日本音楽表現学会、グルッペ・ベッヒライン、アルモ・パレスズ各会員。盛岡バッハ・カンタータ・フェライン会員、テノール・パートリーダー。



沼田 臣矢 (テノール)

岩手県滝沢村出身。盛岡北高、岩手大学教育学部芸術文化過程音楽コースを経て、東京藝術大学声楽科在学中。声楽を佐々木まり子、佐々木正利、川上洋司の各氏に師事。第2回東京国際声楽コンクール学生部門入選。盛岡バッハ・カンタータ・フェライン会員。





小原 一穂 (バス)

岩手大学教育学部音楽科卒業。東京学芸大学大学院修了。声楽を森肇子、今関由紀子、中村義春、移川澄也、佐々木正利、P. フッテンロッハーの各氏に師事。H. クレッチマール、K. ヴィトマー各氏の公開レッスンを通じドイツ歌曲や宗教音楽の歌唱について研鑽を積む。バッハアカデミー修了演奏会に於いてH. リリングの指揮の下ヨハネ受難曲のイエス役を歌い好評を得る。バロック～ロマン派にかけての宗教曲や第九のソリストを多数務める他、歌曲や創作オペラ、ミュージカルの分野でも活躍している。盛岡バッハ・カンタータ・フェライン会員、コンサートマスター。グループ・ベッヒライン会長。盛岡市立城西中学校指導教諭。



千田 敬之 (バス)

岩手県金ヶ崎町出身。岩手県立水沢高校、神奈川大学経済学部卒業。岩手大学大学院教育学研究科教科教育専攻音楽教育専修修了。声楽を佐々木正利氏に師事。神奈川大学合唱団在籍中、多田武彦作曲「尾崎喜八の詩から・第二」初演ソリストをつとめる。第一回スーパー・クラシック・オーディション東北大会出場。釜石フィルハーモニックソサイエティーとの共演で「カルミナ・ブラーナ」バリトンソロをつとめる。盛岡芸術祭、岩手芸術祭に参加。盛岡バッハ・カンタータ・フェライン演奏会にて、カンタータ 106 番のバス・ソロをつとめる。佐々木正利氏のオペラ講座に出演。近年有志と共に、小学校、中学校にて日本歌曲の訪問演奏を行い好評を博す。現在、学習塾経営。盛岡バッハ・カンタータ・フェライン会員。



松田 亜蘭 (バス)

横浜市出身。カナダのマギル大学大学院音楽部声楽科に在学中。声楽を佐々木正利、Sanford Sylvan, Mel Braun, Robert MacLaren、山田雅利の各氏に師事。2009 年、ウィニペグ音楽祭にて声楽グレードA部門優勝、ローズ杯獲得。同年3月、ウィニペグ交響楽団とソロ出演。2010年3月、ウィニペグにて「ヨハネ受難曲」のイエス役を務める。11月には同地のバロック・アンサンブル「カンゾナ」のバッハ「マニフィカト」バス・ソロを務める。2012年9月にはバッハ・コレギウム・ジャパンのヨーロッパツアーに参加しユトレヒトとブレーメンにて公演に出演した。東京21合唱団団員。



鑑賞の手引き

盛岡バッハ・カンタータ・フェライン
コンサートマスター 佐々木幹雄

「珠玉のカンタータ」演奏会へようこそ！本日は、およそ300年前にヨーロッパのザクセン地方(現在のドイツ東部)でヨハン・ゼバスティアン・バッハによってつくられた4つの教会カンタータの演奏をお楽しみ下さい。

教会カンタータとは器楽伴奏つきの独唱や合唱で構成されている組曲で、ルター派教会の礼拝における「説教音楽」として作曲されたものの総称です。毎日曜に教会では礼拝が行われます。そこでは牧師が聖書について解説をしながら神の教えを説きます。その神の教えが教会に集った人々によく伝わるように、人々が心のより深いところにその教えを受け入れるように、そして主なる神を讃えると同時に主によって与えられた自分の「生」を全うするように…と。そのためには言葉によって神の教えを「理解させる」ことに加え、音楽によってそれを「感じさせる」ことが効果的でした。このためルター派教会では礼拝に音楽を積極的にとり入れるようになりました。教会にはカントルと呼ばれる音楽監督を置き、聖歌隊の指導や楽器奏者の確保、教会カンタータの指揮のみならずそれらの音楽の作曲もその役目とされていました。また宮廷付きの教会の場合は宮廷楽団の楽師長がその役目を担っていました。

バッハは生涯に300曲以上の教会カンタータを作曲した^[注1]との記録もあるのですが、現在は残念ながら200曲程度しか残されていません。その中から特徴的な4つの教会カンタータを選んで演奏いたします。第1部の2曲、《キリストは死の縛めに捕われました》BWV 4^[注2]と《ただ愛する神の支配にまかせる人》BWV 93は「コラール・カンタータ」と呼ばれる様式で作曲されています。また第2部の《来てください、甘美な死の時よ》BWV 161はバッハがヴァイマル宮廷の楽師長の時代に、《主よ、あなたの目は信仰を顧みます》BWV 102はライプツィヒの聖トーマス教会のカントルの時代に作曲されたカンタータです。

【第1部】

コラール・カンタータとは、「コラール」と呼ばれるドイツ・プロテスタント教会の賛美歌の旋律や歌詞を素材として作曲された数曲から成る教会カンタータです。コラールの歌詞は聖書と密接に結びついていて、聖書の教えをよりわかりやすく伝えるものとなっています。また、賛美歌として歌われているコラールですから、教会に集う会衆はその旋律を聞くだけで歌詞が自ずと思い起こされるのです。

バッハは教会カンタータを創作するにあたって、いくつかの時期にこのコラールに注目しました。

注1 バッハの次男と弟子による『故人略伝』によると、バッハは5年分のカンタータを残したとされています。1年分でおおよそ60曲ですから、この記述が正しいとすれば300曲ほどが作曲されたと考えられるわけです。

2 「BWV」とはJ.S. バッハの作品目録を意味するBach-Werke-Verzeichnisの頭文字です。20世紀になってW. シュミーターによって編纂されました。ジャンル別に番号が整理されています。バッハ自身が自分の作品に番号をつけたわけではありません。

《キリストは死の縛めに捕われました》BWV 4

1685年に生まれたバッハは、1707年ミュールハウゼンの聖ブラージウス教会にオルガニストの職を得て、22歳で前任地のアルンシュタットから新任地ミュールハウゼンに赴任します。それまではオルガニストの仕事が主でしたが、この時代からカンタータの作曲も始めました。《キリストは死の縛めに捕われました》BWV 4はこの頃の作曲と考えられています。それまでのオルガニストの経験からバッハはコラールに親しんでいたことでしょう、彼はそのコラールを素材としてカンタータ創作の初期に利用したのでした。

このカンタータで用いられているのはM. ルター^[注3]によって作られた復活祭^[注4]のコラールの全7節^[注5]です。キリストの復活を祝うにあたり、その前提である受難の大切さを再確認します。ですから音型や記号など様々なところに受難を象徴する Kreuz^[注6]が表れています。

第1曲 シンフォニア 木短調 4/4拍子

14小節と短い、弦楽による楽曲です。半音下降動機^[注7]が強調され、コラール旋律の冒頭の一節が提示されます。

第2曲 コラール第1節(合唱) 木短調 4/4拍子

引き伸ばされたコラールの定旋律をソプラノが歌い他のパートは歌詞内容を音楽的に注釈するように歌う前半と、アラ・ブレーヴェ^[注8]となって「ハレルヤ」を連呼する後半から成っています。

第3曲 コラール第2節 二重唱(ソプラノ、アルト) 木短調 4/4拍子

執拗に繰り返される2度音程で進行する通奏低音に乗って、宿命としての死についてソプラノとアルトが模倣し合いながら歌います。

第4曲 コラール第3節 アリア(テノール) 木短調 4/4拍子

力強い下行音型でイエス・キリストの来臨をヴァイオリンが象徴する中、自身の死をもって人々の罪を取り除いたイエスについてテノールが歌います。

第5曲 コラール第4節 合唱 木短調 4/4拍子

コラールの定旋律はアルトに現れます。他のパートは生と死の激しい戦いの様子を対位的に表現します。シンメトリック^[注9]な構成をもつこのカンタータの中心に位置する楽曲です。

注3 Martin Luther (1483-1546)。宗教改革を起こしたドイツの神学者です。礼拝に音楽が大切だと考え、コラールを編集したり礼拝に音楽を積極的に採り入れたりしました。

4 「復活祭」とは、イエス・キリストが十字架で亡くなった後、三日後に復活したという出来事を記念して行われる礼拝です。

5 1524年にルターによって作詩された同名のコラールです。コラールをカンタータの素材として採り上げる場合、もとのコラールの歌詞をそのまま用いる場合と、もとのコラールの歌詞を扱いながら部分的にパラフレーズして用いる場合の2つのタイプがあります。BWV 4は前者に、BWV 93は後者にあたります。

6 ドイツ語で「Kreuz」とは「十字架」の他に音楽記号の「#」(シャープ)も意味します。

7 元のコラールでは、開始音から次の音に移る際に長2度下がりますが、BWV 4の主題として扱う際にバッハは大胆にもこの音程を短2度に変えました(#を付けて!)。これによって音楽的な深みが増しました。

8 「アラ・ブレーヴェ」(alla breve)とは、倍のテンポの4/4拍子。4分音符の変わりに2分音符が単位拍となります。

9 「シンメトリー」とは、対称性のこと。この曲はコラールの歌詞に基づいて次のような対称的な構成がとられています。

第1節 合唱

第2節 二重唱

第3節 アリア

第4節 合唱

第5節 アリア

第6節 二重唱

第7節 合唱

第6曲 コラール第5節 アリア(バス) 木短調 3/4拍子

第4曲で語られた受難について、ここでは旧約聖書の文脈から注釈されます。3拍子に編曲された定旋律をバスが歌い、弦楽合奏がそれを模倣していきます。

第7曲 コラール第6節 二重唱(ソプラノ、テノール) 木短調 4/4拍子

第3曲に対応する二重唱です。付点のリズムの通奏低音^[注10]に乗って、復活祭の喜びを歌います。ここに至ってついに生が勝利し、死の影はもうありません。

第8曲 コラール第7節 コラール 木短調 4/4拍子

簡素な4声体の和声付けによってコラールの定旋律が示されます。キリストのみを糧とする信仰に生きる決意を力強く歌います。

《ただ愛する神の支配にまかせる人》BWV 93

バッハは1723年、38歳の時にライプツィヒに移り聖トーマス教会のカントルの役職に就きます。その職務内容は、教会付属の学校で生徒に音楽を教える教師の仕事と、ライプツィヒ市全体の音楽監督として聖ニコライ教会をも含めた2つの主要教会の音楽に関わることを全てを監督することでした。このような大役に就いた最初の年、バッハは教会暦にそったほぼ1年分のカンタータ60曲近く^[注11]を旧作の改変^[注12]などを交えて作曲しました。そして2年目にはほぼ新曲のみで新たなカンタータ年巻を作り上げています。その2年目のうち5ヶ月ほどにわたって40曲ものコラール・カンタータを続けて作曲します。《ただ愛する神の支配にまかせる人》BWV 93はその中の6番目の作品^[注13]です。

7月9日、三位一体節後第5日曜日に初演されたこのカンタータのもとになっているのは、G.ノイマルク^[注14]のコラールです。第1、4、7曲ではコラールの歌詞(第1、4、7節)をそのまま使っていますが、他の曲ではコラールの歌詞をパラフレーズ^[注15]しています。この日の説教では「ペテロの大漁」(ルカによる福音書第5章第1-11節)^[注16]が扱われました。

注10 「通奏低音」とは、楽曲において上の旋律を持続的に支える低音パートのことをいいます。「ゲネラルバス」や「バスソコンティヌオ」とも言います。

11 毎日曜日など礼拝の機会のために作曲された1年分のカンタータを「カンタータ年巻」と呼んでいます。

12 たとえば楽器の編成を変えたり曲を加除したり「パロディー」と呼ばれる手法で作り変えたりしていました。

13 バッハは自己表現として作曲したわけではなく、教会において神に捧げるもの、という意識で音楽を作っていました。ですから近現代的な意味での「作品」ではなく、あくまで単に「作られたもの」という広義の意味で「作品」という用語を使います。

14 Georg Neumark (1621-1681)。ヴァイマルの宮廷で図書館司書をしていました。詩人であり作曲もしました。

15 「パラフレーズ」とは、他の言葉で元々の文や一節を言い換えることです。音楽的な意味でも用いられますが、ここでは歌詞・言葉についてのことです。

16 教会暦における各主日の説教では、その日に読まれ説教される聖書の章句と書簡の章句が決められています。それを「ペリコーペ」とよびます。

『ルカによる福音書』第5章第1-11節には次のように記されています。(番号は節を示します。)

1 イエスがゲネサレト湖畔に立っておられると、神の言葉を聞こうとして、群衆がその周りに押し寄せて来た。2 イエスは、二そうの舟が岸にあるのを御覧になった。漁師たちは、舟から上がって網を洗っていた。3 そこでイエスは、そのうちの二そうであるシモンの持ち舟に乗り、岸から少し漕ぎ出すようにお頼みになった。そして、腰を下ろして舟から群衆に教え始められた。4 話し終わったとき、シモンに、「沖に漕ぎ出して網を降ろし、漁をなさなさい」と言われた。5 シモンは、「先生、わたしたちは、夜通し苦労しましたが、何もとれませんでした。しかし、お言葉ですから、網を降ろしてみましよう」と答えた。6 そして、漁師たちがそのとおりにすると、おびただしい魚がかかり、網が破れそうになった。7 そこで、もう二そうの舟にいる仲間に合図して、来て手を貸してくれるように頼んだ。彼らは来て、二そうの舟を魚でいっぱいにしたので、舟は沈みそうになった。8 これを見たシモン・ペトロは、イエスの足もとにひれ伏して、「主よ、わたしから離れてください。わたしは罪深い者なのです」と言った。9 とれた魚にシモンも一緒にいた者も皆驚いたからである。10 シモンの仲間、ゼベダイの子のヤコブもヨハネも同様だった。すると、イエスはシモンに言われた。「恐れることはない。今から後、あなたは人間をとる漁師になる。」11 そこで、彼らは舟を陸に引き上げ、すべてを捨ててイエスに従った。

第1曲 コラール(合唱) ハ短調 12/8拍子

弦楽合奏にオーボエが2本加わる編成で器楽リトルネッロ^[注17]が始まり、先行する数パートの合唱がコラール旋律を装飾しながら歌い、それに続いて全パートによってコラール定旋律が示される、という順を繰り返しながらコラールの各節が歌われていきます。

第2曲 コラールとレチタティーヴォ(バス) ト短調 4/4拍子

現世の苦悩を歌うコラールの第2節と、その行間を補いながら語る自由詩によるレチタティーヴォ^[注18]が交互に現れます。

第3曲 アリア(テノール) 変ホ長調 3/8拍子

長調へと変えられたコラール定旋律を素材としています。明るい曲調となり、神の救いへの期待が歌われます。2小節ごとに8分休符が挟み込まれる動機は、「静まりてあれ」の歌詞を具現化しています。

第4曲 コラール付二重唱(ソプラノ、アルト) ハ短調 4/4拍子

全曲の中心に位置する二重唱です。神が全知全能であることを、コラール定旋律をもとにした旋律を模倣しながらソプラノとアルトが歌います。コラール定旋律は弦楽の全奏で登場します。歌詞は付いていないのですが、聞き手の心にはコラールの歌詞が自ずと思い起こされる、という効果があります。

第5曲 コラールとレチタティーヴォ(テノール)

第2曲と同様の作法ながら、規模や表現が歌詞に応じて大きくなっています。神のみを依り頼むべしとテノールが戒めながら、終盤では「ペテロの大漁」の意味が説かれます。

第6曲 アリア(ソプラノ) ト短調 4/4拍子

オーボエのオブリガート^[注19]を伴った、主なる神に全幅の信頼を寄せるソプラノのアリアです。ソプラノの旋律の後半にコラール旋律が部分的に現れます。

第7曲 コラール(合唱) ハ短調 4/4拍子

簡素な4声体のコラールです。全曲を通して耳に触れてきたコラール定旋律が前面に現れることによって、全曲で歌われたり語られたりしてきたことが集約され、会衆の共同の祈りとなって歌われます。

注17 「リトルネロ形式」とは、ソロ(独奏)的な部分では自由に音楽が展開し、それと対比的にトゥッティ(総奏)部分では同じことを繰り返し、それらが交互に出現するといった音楽形式です。

18 「レチタティーヴォ」とは、話しことばの自然な抑揚を模倣したり強調したりした様式で、「叙唱」と訳されています。

19 「オブリガート」とは、助奏のこと。とくにバロック音楽ではある程度の即興演奏が許されている通奏低音パートに対して、完全に楽譜に書き込まれていて主旋律と同等の重要性をもつ伴奏パートのことを言います。

【第2部】

ミュールハウゼンに1年間ほど勤めた後、1708年にバッハは宮廷オルガニスト兼宮廷楽師としてヴァイマルに赴きます。それから6年後の1714年、29歳の彼は「宮廷楽師長」に昇格します。それに伴って毎月新作のカンタータを演奏する義務を負うようになりました。《来てください、甘美な死の時よ》BWV 161はそれから2年半ほど経った1716年の9月27日、三位一体節後第16日曜日に初演されています。

この頃のカンタータは、主に宮廷直属の台本作者S. フランク^[注20]の歌詞集によって作られています。フランクはE. ノイマイスター^[注21]が新たに考案したカンタータの歌詞集のスタイル、すなわちそれまでオペラでしか使われていなかったレチタティーヴォやアリアを採り入れるやりかたに影響を受けて歌詞集を作りました。その中の一つ、歌詞集『福音主義の祈りの捧げもの』(1715)によるカンタータをバッハは1715-16年に10曲作りました。本カンタータはその9番目のものです。

この日の説教では「ナインの若者の甦り」(ルカによる福音書第7章第11-17節)^[注22]が扱われました。敬虔主義的^[注23]なフランクの歌詞は、甦らせられたナインの若者を死にゆく自分に重ね合わせながら、イエスによって来世の命を得る喜びを表現しています。

第1曲 アリア(アルト) ハ長調 4/4拍子

2つのリコーダー(本日はフルートで演奏)によるオブリガートと通奏低音が穏やかに奏でられる中、アルトが死への憧れを歌います。オルガンに現れるコラールの旋律はH. L. ハスラー^[注24]によるもので、『心より私は望みます、幸せな最後を』という歌詞^[注25]をもつコラールです。

第2曲 レチタティーヴォ(テノール)

現世の歎びとの決別を語り、キリストのもとに行くことの歎びを語ります。真の歎びを口にする時には、通奏低音のリズムが沸き立っています。

第3曲 アリア(テノール) イ短調 3/4拍子

続けて、救い主を抱くという望みを、テノールが弦楽合奏とともに歌います。

第4曲 レチタティーヴォ(アルト)

弦楽とリコーダーを伴った情熱的なアルトのレチタティーヴォです。「最期の時の音」の歌詞に至るとリコーダーは16分音符の連打、弦楽器はピッツィカートで時を刻むように表現します。

注 20 Salomon Franck (1659-1725)。ヴァイマルの聖職会議書記をつとめた詩人です。

21 Erdmann Neumeister (1671-1756)。レチタティーヴォとアリアというオペラの要素を教会に持ち込んだ新しいタイプのカンタータ歌詞集を書いたルター派の牧師です。教会暦5年分の歌詞集を書き出版しました。

22 『ルカによる福音書』第7章第11-17節には次のように記されています。(番号は節を示します。)

11 それから間もなく、イエスはナインという町に行かれた。弟子たちや大勢の群衆も一緒であった。12 イエスが町の門に近づかれると、ちょうど、ある母親の一人息子が死んで、棺が担ぎ出されるところだった。その母親はやもめであって、町の人が大勢そばに付き添っていた。13 主はこの母親を見て、憐れに思い、「もう泣かなくともよい」と言われた。14 そして、近づいて棺に手を触れられると、担いでいる人たちは立ち止まった。イエスは、「若者よ、あなたに言う。起きなさい」と言われた。15 すると、死人は起き上がったものを言い始めた。イエスは息子をその母親にお返しになった。16 人々は皆恐れを抱き、神を賛美して、「大預言者が我々の間に現れた」と言い、また、「神はその民を心に掛けてくださった」と言った。17 イエスについてのこの話は、ユダヤの全土と周りの地方一帯に広まった。

23 「敬虔主義」とは、ルター派に起こった宗教運動で、正統派のやや形式的な立場に満足せず、「生き生きした信仰と再生」を求めて起こった思想です。宗教体験を重視し、禁欲的な生活を信条とし、キリスト教的信念の覚醒を求めたそうです。バッハもこの考えから多少の影響を受けたと考えられています。

24 Hans Leo Hassler (1564-1612)。ルネサンス期ドイツの最大の作曲家です。イタリアの様式とドイツの様式を融合させたことで知られています。

25 このコラールの旋律はP. ゲールハルトが1656年に「血と傷にまみれし御頭(0 Haupt voll Blut und Wunden)」と歌い出す10節から成る、通称「受難のコラール」としても知られています。バッハはこのカンタータBWV161をその後1735年頃に再演した際、Ch. クノルが1599年に作った「心より私は望みます(Herzlich tut mich verlangen)」と歌い出す7節から成る歌詞の方を選んで、その第1節をソプラノに歌わせています。

第5曲 合唱 ハ長調 3/8拍子

前曲の「最後の時の音」が鳴り止むと、浄化された雰囲気の中で優しく包み込むような前奏に乗って、合唱が死への憧れ、イエスのいる天国への憧れを歌います。

第6曲 コラール(合唱) イ短調 4/4拍子

第1曲に登場したコラールが、リコーダーのオブリガートを伴った4声体で登場します。死を迎えたあとに永遠の命を得ることの喜びを歌います。

ライプツィヒに移ってから3年目にあたる1726年の三位一体節以降、バッハは『ルードルシュタット詩華撰』^[注26]という歌詞本を使ってカンタータを7つ作曲しています。《主よ、あなたの目は信仰を顧みます》BWV 102はその中の1つで、1726年8月25日に初演されました。この日の説教は「エルサレムの破壊の預言と、神殿からの商人の追放」(ルカによる福音書第19章第41-48節)^[注27]でした。音楽は『ルードルシュタット詩華撰』特有の構成、つまり新約章句を中心にシンメトリカルに曲が配置された二部構成で書かれています。

第1曲 合唱 ト短調 4/4拍子

2つのオーボエと弦楽合奏および通奏低音、合唱による冒頭の合唱です。信仰心が無く回心しようとしないう厚顔な者を嘆くエレミヤの言葉を見事に音楽化しています。

第2曲 レチタティーヴォ(バス)

人を悔い改めに導き、神との執り成しをしてくれるはずの霊(Geist)の迷いを指摘します。

第3曲 アリア(アルト) アダージョ ヘ長調 4/4拍子

冒頭から不安な旋律を響かせるオーボエのオブリガート付きのアリアです。悔い改めようとしないう人の魂(Seele)を嘆いて歌います。

第4曲 アリオソ(バス) ヴィヴァーチェ 変ホ長調 3/8拍子

第1部の終わりにあたって新約聖書の『ローマ人への手紙』の第2章第4-5節が、神による救済の予告として歌われます。作曲当時の礼拝では、第1部が終わると牧師による説教があり、その後第2部が演奏されました。

第5曲 アリア(テノール) ト短調 3/4拍子

説教後にはフルートを伴ったテノールが、神を顧みず緩んでしまった魂を厳しい口調で責め立てます。気づかないでいればいるほど神の裁きが厳しくなると。

第6曲 レチタティーヴォ(アルト)

いつ何時神の裁きの時が訪れるかわからないのだから今すぐにでも悔い改めて備えなさい、とオーボエの短い動機を伴ってアルトが切々と歌います。

第7曲 コラール(合唱) ハ短調 4/4拍子

簡素な4声体のコラールです。いつ死が訪れるかわからないから悔い改めにお導きください、と教会に集う会衆の祈りとして主なる神に向かって歌われます。

2012/12/26

注 26 ルードルシュタットの宮廷カントルであるクリストフ・ヘルムによって書かれたカンタータの歌詞集です。これらには、(1)二部構成、(2)第1部の冒頭は旧約聖書句で第2部冒頭は新約聖書句(BWV 102は例外)、(3)中間楽章のアリアとレチタティーヴォがシンメトリに配置されている、といった特徴があります。

27 『ルカによる福音書』第19章第41-48節には次のように記されています。

41 エルサレムに近づき、都が見えたとき、イエスはその都のために泣いて、42 言われた。「もしこの日に、お前も平和への道をわきまえていたなら……。しかし今は、それがお前には見えない。43 やがて時が来て、敵が周りに堡塁を築き、お前を取り巻いて四方から攻め寄せ、44 お前とそこにいるお前の子らを地にたたきつけ、お前の中の石を残らず崩してしまうだろう。それは、神の訪れてくださる時をわきまえなかったからである。」45 それから、イエスは神殿の境内に入り、そこで商売をしていた人々を追いつき始めて、46 彼らに言われた。「こう書いてある、『わたしの家は、祈りの家でなければならない。』ところが、あなたたちはそれを強盗の巣にした。」47 毎日、イエスは境内で教えておられた。祭司長、律法学者、民の指導者たちは、イエスを殺そうと謀ったが、48 どうすることもできなかった。民衆が皆、夢中になってイエスの話に聞き入っていたからである。

BWV 4

Christ lag in Todesbanden

<Kantate zum 1. Osterfesttag>

BWV 4 - I

キリストは死の縛めに捕われました

《復活祭第1日目のためのカンタータ》

1. Sinfonia

1. シンフォニア

2. Vers 1 (Sopran, Alt, Tenor und Baß)

Christ lag in Todesbanden
Für unsre Sünd gegeben,
Er ist wieder erstanden
Und hat uns bracht das Leben;
Des wir sollen fröhlich sein,
Gott loben und ihm dankbar sein
Und singen Halleluja,
Halleluja!

2. 第1節 (合唱)

キリストは死の縛めに捕われ、
私たちの罪のために捧げられました。
しかし 彼は甦り、
私たちに命をもたらしたのです。
それゆえに、私たちは喜び
神を賛え、神に感謝し
主を賛美する歌を歌いましょう。
ハレルヤ！

3. Vers 2 (Sopran und Alt)

Den Tod niemand zwingen kunnt
Bei allen Menschenkindern,
Das macht alles unsre Sünd,
Kein Unschuld war zu finden.
Davon kam der Tod so bald
Und nahm über uns Gewalt,
Hielt uns in seinem Reich gefangen.
Halleluja!

3. 第2節 (ソプラノとアルトパートによる合唱)

死を避けることなど 誰一人できませんでした、
皆 人の子である限り。
死は私たちの罪から来たのであり、
罪のない者など いなかったのですから。
死は即座に訪れ、
私たちを支配し、
死の国に捕えて放しませんでした。
ハレルヤ！

4. Vers 3 (Tenor)

Jesus Christus, Gottes Sohn,
An unser Statt ist kommen,
Und hat die Sünde weggetan,
Damit dem Tod genommen
All sein Recht und sein Gewalt,
Da bleibet nichts denn Tods Gestalt,
Den Stach'l hat er verloren.
Halleluja!

4. 第3節 (テノールパートによる合唱)

イエス・キリスト、神の子は
私たちのところへやって来て、
罪を取り除いてくれました。
それによって、死から取り去ったのです
あらゆる その権利と支配の力を。
そこには 死の残骸以外 何も残らず、
棘を 死は失いました。
ハレルヤ！

5. Vers 4 (Sopran, Alt, Tenor und Baß)

Es war ein wunderlicher Krieg,
Da Tod und Leben rungen,
Das Leben behielt den Sieg,
Es hat den Tod verschlungen.
Die Schrift hat verkündigt das,
Wie ein Tod den andern fraß,
Ein Spott aus dem Tod ist worden.
Halleluja!

6. Vers 5 (Baß)

Hier ist das rechte Osterlamm,
Davon Gott hat geboten,
Das ist hoch an des Kreuzes Stamm
In heißer Lieb gebraten.
Des Blut zeichnet unsre Tür,
Das hält der Glaub dem Tode für,
Der Würger kann uns nicht mehr schaden.
Halleluja!

7. Vers 6 (Sopran und Tenor)

So feiern wir das hohe Fest
Mit Herzensfreud und Wonne,
Das uns der Herr erscheinen läßt,
Er ist selber die Sonne,
Der durch seiner Gnade Glanz
Erleuchtet unsre Herzen ganz,
Der Sünden Nacht ist verschwunden.
Halleluja!

8. Vers 7 (Sopran, Alt, Tenor und Baß)

Wir essen und wir leben wohl
In rechten Osterfladen.
Der alte Sauerteig nicht soll
Sein bei dem Wort der Gnaden.
Christus will die Koste sein
Und speisen die Seel allein,
Der Glaub will keins andern leben.
Halleluja!

5. 第4節 (合唱)

ある不思議な戦いがあり、
そこで死と生が争いました。
生が勝利をつかみ、
死は飲み込まれました。
聖書はこれを伝えてきました、
一人の死が 他の数々の死を食いつくし、
死は嘲られるものになったのだと。
ハレルヤ!

6. 第5節 (バス)

ここにある 真の過越の子羊は、
神によって定められました。
この子羊は十字架の幹の高くにて、
熱い愛でその身を焼きました。
その血は私たちの戸に塗られ、
その戸を 信仰が死に対してかざせば、
死神も もう私たちを傷つけることはできません。
ハレルヤ!

7. 第6節 (ソプラノとテノール)

ですから 私たちはこの大きな祭りを祝います
心からの喜びと、歓喜をもって。
この祭りを主は 私たちのために輝かせます、
主自身がまさしく太陽なのです。
主がその恵みの輝きによって
私たちの心のすべてを照らし出し、
罪の夜は消え去るのです。
ハレルヤ!

8. 第7節 (合唱)

私たちは食べ、健やかに暮らします、
真の過越のパンによって。
古いパン種は恵みの言葉のもとには
あるべきではありません。
ただキリストだけが 糧となって
魂を養おうとしてくれます、
信仰は何か他のものによって生きようとは望みません。
ハレルヤ!

BWV 93

Wer nur lieben Gott läßt walten

<Kantate zum 5. Sonntag nach Trinitatis>

1. Chor

Wer nur den lieben Gott läßt walten
Und hoffet auf ihn allezeit,
Den wird er wunderbarlich erhalten
In allem Kreuz und Traurigkeit.
Wer Gott, dem Allerhöchsten, traut,
Der hat auf keinen Sand gebaut.

2. Choral und Rezitativ (Baß)

Was helfen uns die schweren Sorgen?
Sie drücken nur das Herz
Mit Zentnerpein, mit tausend Angst und Schmerz.
Was hilft uns unser Weh und Ach?
Es bringt nur bittres Ungemach.
Was hilft es, daß wir alle Morgen
Mit Seufzen von dem Schlaf aufstehn
Und mit betränntem Angesicht des Nachts zu Bette gehn?
Wir machen unser Kreuz und Leid
Durch bange Traurigkeit nur größer.
Dum tut ein Christ viel besser,
Er trägt sein Kreuz mit christlicher Gelassenheit.

3. Arie (Tenor)

Man halte nur ein wenig stille,
Wenn sich die Kreuzesstunde naht,
Denn unsres Gottes Gnadenwille
Verläßt uns nie mit Rat und Tat.
Gott, der die Auserwählten kennt,
Gott, der sich uns ein Vater nennt,
Wird endlich allen Kummer wenden
Und seinen Kindern Hilfe senden.

BWV93 - I

ただ 愛する神の支配にまかせる人

《三位一体の祝日後第5日曜日のためのカンタータ》

1. 合唱

ただ 愛する神の支配にまかせる人、
そして 神にどんな時も望みを抱く人、
その人を 神は見事に護ってくれるでしょう、
どんな十字架と悲しみにあろうとも。
神を、至高者を信じる人、
その人は 砂の上に家を建ててはいないのです。

2. コラールとレツィタティーフ (バス)

重い不安が 何の役に立つだろう？
それはただ 心にのしかかる、
百キロの苦痛、千の怖れと痛みと共に。
悲しみと嘆きの声が 何の役に立つだろう？
それはただ 辛い不幸をもたらすだけだ。
何に役に立つだろう？ 私たちが毎朝
うめきと共に眠りから目覚め起き
涙で濡れた顔で夜、床へついて。
私たちは自分の十字架と苦悩を
不安な悲しみで ただ大きくしているだけだ。
だから キリスト者のすることの方が遙かに良い、
自分の十字架を キリスト者としての穏やかさで担うのだから。

3. アリア (テノール)

わずかでも冷静さを保っていよ、
十字架の時が近づいてくる時にも。
なぜなら 私たちの神の 恵みの意思是
私たちを助言と行いで見放しはしないのだから。
神、選ばれた者たちを知る方は、
神、私たちのために 自らを父と名乗ってくれる方は、
最後には あらゆる悲しみを逸らせ
自分の子供たちに 救いを送ってくれるだろう。

4. Arie (Duett: Sopran und Alt)

Er kennt die rechten Freudesstunden,
Er weiß wohl, wenn es nützlich sei;
Wenn er uns nur hat treu erfunden
Und merket keine Heuchelei,
So kömmt Gott, eh wir uns versehn,
Und lässet uns viel Guts geschehn.

5. Choral und Rezitativ (Tenor)

Denk nicht in deiner Drangsallhitze,
Wenn Blitz und Donner kracht
Und die ein schwüles Wetter bange macht,
Daß du von Gott verlassen seist.
Gott bleibt auch in der größten Not,
Ja gar bis in den Tod
Mit seiner Gnade bei den Seinen.
Du darfst nicht meinen,
Daß dieser Gott im Schoße sitze,
Der täglich wie der reiche Mann,
In Lust und Freuden leben kann.
Der sich mit stetem Glücke speist,
Bei lauter guten Tagen,
Muß oft zuletzt,
Nachdem er sich an eitler Lust ergötzt,
„Der Tod in Töpfen“ sagen.
Die folgend Zeit verändert viel!
Hat Petrus gleich die ganze Nacht
Mit leerer Arbeit zugebracht
Und nichts gefangen:
Auf Jesu Wort kann er noch einen Zug erlangen.
Drum traue nur in Armut, Kreuz und Pein
Auf deines Jesu Güte
Mit gläubigem Gemüte;
Nach Regen gibt er Sonnenschein
Und setzet jeglichem sein Ziel.

4. アリア (ソプラノとアルトの二重唱)

神は正しい喜びの時を知っています、
神はよく分かっています、いつそれが役に立つかを。
神がただ 私たちに誠実さを見出し
どんな偽善も感じ取ることがなければ、
神は来ます、私たちが予期する前に、
そして 多くの良い事を 私たちにもたらしてくれるのです。

5. コラールとレツィタティーフ (テノール)

自分が激しい災厄の中にあって、
稲妻と雷鳴が鳴り響き
重苦しい天候で不安にさせられても、
神に見捨てられてしまったと思っはならない。
神はこの上なく大きな苦しみにおいても
そう、死に至るまで
その恵みと共に 自分の者たちの側に留まってくれるのだから。
あなたは思っはならない、
こういう人が神の懷に護られていると、
日々 金持ちのように、
享楽と喜びにふけって生きることができる人が。
自分に絶え間ない幸福を味わわせている人、
良い毎日ばかりを送る者は、
多くの場合 結局は
虚しい快樂に興じた後に
「鍋の中に死の毒が入っている」と言うに違いないのだ。
後には多くのものが変えられる！
ペトロは夜を徹して
空しい労働に励んだ結果
何一つ網に掛からなかった。
だが イエスの言葉に従って もう一網で釣果を得たのだ。
だから貧困と十字架と苦痛の中でも ひたすら信頼しなさい、
あなたのイエスの慈しみを
信仰深い気持ちでもって。
雨の後には イエスは太陽の輝きを与え
そしてどんな人にも その終わりを定めるのだから。

6. Arie (Sopran)

Ich will auf den Herren schauen
Und stets meinem Gott vertraun.
Er ist der rechte Wundermann.
Der die Reichen arm und bloß
Und die Armen reich und groß
Nach seinem Willen machen kann.

6. アリア (ソプラノ)

私は主を見つめ
いつも私の神に頼ります。
主は真の奇跡の人。
主は富める人を貧しく、裸にし
貧しい人を富ませ、強くし
自分の思いのままに行います。

7. Choral

Sing, bet und geh auf Gottes Wegen,
Verricht das Deine nur getreu
Und trau des Himmels reichem Segen,
So wird er bei dir werden neu;
Denn welcher seine Zuversicht
Auf Gott setzt, den verläßt er nicht.

7. コラール (合唱)

歌い、祈り、神の道を歩みなさい、
あなたの務めを忠実に果たし
天の豊かな祝福を信じなさい、
そうすれば その祝福はあなたのもとで新たに変わります。
なぜなら 自分の確かな期待を
神にかける人、その人を神は見捨てないからです。



珠玉のカンタータ ～バッハからの贈り物～ 演奏会、いわゆる「珠玉 Vol. 1」

2008. 6. 1 盛岡市民文化ホール(マリオス) 大ホール

BWV 161

Komm, du süße Todesstunde

<Kantate zum 16. Sonntag nach Trinitatis>

1. Arie (Alt) und Choral (Sopran)

Komm, du süße Todesstunde,
Da mein Geist
Honig speist
Aus des Löwen Munde;
Herzlich tut mich verlangen
Nach einem sel'gen End,
Weil ich hier bin umfängen
Mit Trübsal und Elend.
Mache meinen Abschied süße,
Säume nicht,
Letztes Licht,
Daß ich meinen Heiland küsse.
Ich hab Lust abzuschneiden
Von dieser bösen Welt,
Sehn mich nach himml'schen Freuden,
O Jesu, komm nur bald!

2. Rezitativ (Tenor)

Welt, deine Lust ist Last,
Dein Zucker ist mir als ein Gift verhaßt,
Dein Freudenlicht
Ist mein Komete,
Und wo man deine Rosen bricht,
Sind Dornen ohne Zahl
Zu meiner Seele Qual.
Der blasse Tod ist meine Morgenröte,
Mit solcher geht mir auf die Sonne
Der Herrlichkeit und Himmelswonne.
Dum seufz ich recht von Herzensgrunde
Nur nach der letzten Todesstunde.
Ich habe Lust, bei Christo bald zu weiden,
Ich habe Lust, von dieser Welt zu scheiden.

BWV161-1

来てください、甘美な死の時よ

《三位一体の祝日後第16日曜日のためのカンタータ》

1. アリア (アルト) とコラール (ソプラノ)

来てください、甘美な死の時よ、
その時 私の霊は
蜜を味わいます
ライオンの口から。
心から私は望みます
幸せな最期を。
私はここでは取り囲まれているのですから
苦難と不幸によって。
私の別れを甘くしてください、
遅れないでください、
最期の光よ、
私は自分の救い主と口づけするのですから。
私は逝くことを望んでいます
この悪しき世から別れることを。
私は天上の喜びに憧れているのです、
おお イエスよ、どうかすぐ来てください！
(コラールが歌われたのはライブツィヒ演奏時)

2. レツィタティーフ (テノール)

世よ、おまえの欲びは重荷だ、
おまえの砂糖は 私には毒のように嫌なもの、
おまえの喜びの光は
私には流れ星のように儚く、
人が おまえのバラを摘むところでも、
無数の茨が
私の魂には苦悩となる。
青ざめた死が 私の朝焼け、
それと共に 私に太陽が昇る、
栄光と天の歓喜に輝きながら。
だから 私は本当に心の底から溜め息をつくのだから
ただ最期の死の時を想って。
私の欲びは、キリストの側へ すぐ向かうこと、
私の欲びは、この世から別れること。

3. Arie (Tenor)

Mein Verlangen
Ist, den Heiland zu umfassen
Und bei Christo bald zu sein.
Ob ich sterblich Asch und Erde
Durch den Tod zermalmet werde,
Wird der Seele reiner Schein
Dennoch gleich den Engeln prangen.

4. Rezitativ (Alt)

Der Schluß ist schon gemacht,
Welt, gute Nacht!
Und kann ich nur den Trost erwerben,
In Jesu Armen bald zu sterben:
Er ist mein sanfter Schlaf.
Das kühle Grab wird mich mit Rosen decken,
Bis Jesus mich wird auferwecken,
Bis er sein Schaf
Führt auf die süße Lebensweide,
Daß mich der Tod von ihm nicht scheide.
So brich herein, du froher Todestag,
So schlage doch, du letzter Stundenschlag!

5. Chor

Wenn es meines Gottes Wille,
Wünsch ich, daß des Leibes Last
Heute noch die Erde fülle,
Und der Geist, des Leibes Gast,
Mit Unsterblichkeit sich kleide
In der süßen Himmelsfreude.
Jesu, komm und nimm mich fort!
Dieses sei mein letztes Wort.

6. Choral

Der Leib zwar in der Erden
Von Würmen wird verzehrt,
Doch auferweckt soll werden,
Durch Christum schön verklärt,
Wird leuchten als die Sonne
Und leben ohne Not
In himml'scher Freud und Wonne.
Was schadt mir denn der Tod?

3. アリア (テノール)

私の望みは、
救い主を抱き
早くキリストの側にいることだ。
死ぬべき灰と土くれの私が
死によって押し潰されようとも、
この魂の清い輝きは
なおも 御使いのように煌めくだろう。

4. レツィタティーフ (アルト)

終わりは すでに来ています、
世よ、おやすみなさい！
私は この慰めだけは得られました、
イエスの腕の中でもうすぐ死ぬるのです。
イエスが 私の優しい眠り。
涼しい墓が 私をバラで覆うでしょう、
イエスが私を甦らせるまで、
イエスが自分の羊を
甘い命の牧場へ導くまで。
それで 死が私をイエスから引き離すことはなくなります。
さあ 現れてください、喜ばしい死の日よ、
さあ 打ってください、最期の時の音よ！

5. 合唱

それが 私の神の意志ならば、
私は望みます、この体の重荷が
今日にも地を満たすことを。
そうして この霊は、体の客人は、
死ぬことなく
甘い天の喜びに包まれるのです。
「イエスよ、来て 私を連れ去ってください！」
これこそが私の最期の言葉でありますように。

6. コラール

確かにこの体は大地で
虫によって食い尽くされるでしょう。
ですが甦らせられ、
キリストによって美しく変えられて、
太陽のように輝き
苦しみなく生きるのです、
天上の喜びと歓喜の内に。
どうして死が私の損になるでしょう？

BWV 102

Herr, deine Augen sehen nach dem Glauben!

< Kantate zum 10. Sonntag nach Trinitatis >

Erster Teil

1. Chor

Herr, deine Augen sehen nach dem Glauben!

Du schlägest sie, aber sie fühlen's nicht;

du plagest sie, aber sie bessern sich nicht.

Sie haben ein härter Angesicht denn ein Fels

und wollen sich nicht bekehren.

2. Rezitativ (Baß)

Wo ist das Ebenbild, das Gott uns eingeprägt,

Wenn der verkehrte Will sich ihm zuwiderleget?

Wo ist die Kraft von seinem Wort,

Wenn alle Besserung weicht aus dem Herzen fort?

Der Höchste suchet uns durch Sanftmut zwar zu zähmen,

Ob der verirrt Geist sich wollte noch bequem;

Doch, fährt er fort in dem verstockten Sinn,

So gibt er ihn in's Herzens Dünkel hin.

3. Arie (Alt)

Weh der Seele, die den Schaden

Nicht mehr kennt

Und, die Strafe auf sich zu laden,

Störrig rennt,

Ja von ihres Gottes Gnaden

Selbst sich trennt.

4. Arioso (Baß)

Verachtest du den Reichtum seiner Gnade,

Geduld und Langmütigkeit?

Weißest du nicht, daß dich Gottes Güte zur Buße locket?

Du aber nach deinem verstockten und unbußfertigen Herzen

häufest dir selbst den Zorn

auf den Tag des Zorns

und der Offenbarung des gerechten Gerichts Gottes.

BWV102 - I

主よ、あなたの目は信仰を顧みます!

《三位一体の祝日後第10日曜日のためのカンタータ》

第一部

1. 合唱

主よ、あなたの目は信仰を顧みます!

あなたが打っても、彼らは感じず、

あなたが苦しめても、彼らは改めません。

彼らはその顔を岩よりも固くして

立ち返ろうとしないのです。

(『エレミア書』第5章3節)

2. レツィタティーフ (バス)

神が私たちに刻み込んでくれた、似姿はどこに?

正反対の意志が 神に逆らっているというのに。

神の言葉から受けた力はどこに?

改心する気持ちが すべて心から消え去っているというのに。

至高者は確かに優しさによって 私たちを制そうとしてくれる、

さまよう霊がそれを受け入れようとするように。

だが、霊は頑なな気持ちから離れようとしなない、

それで 神は霊を 心の自惚れにゆだねさせておくのだ。

3. アリア (アルト)

不幸です、自分の傷に

気づかない魂は。

そして、罰を自分に招こうと

強情に突き進み、

まさに 自分の神の恵みから

自ら離れていく魂も。

4. アリオージョ (バス)

あなたは見くびるのか? 神の恵み、

忍耐、寛容の豊かさを。

分からないのか? 神の善意が あなたを悔い改めに導くことが。

あなたは 頑なな悔い改めない心で

自分の上に神の怒りを積み上げる、

怒りの日に向けて、

神の正しい裁きが明らかになる日に向けて。

(『ローマ人への手紙』第2章4節~5節)

Zweiter Teil

第二部

5. Arie (Tenor)

Erschrecke doch,
Du allzu sichere Seele!
Denk, was dich würdig zähle
Der Sünden Joch.
Die Gotteslangmut geht auf einem Fuß von Blei,
Damit der Zorn hernach dir desto schwerer sei.

5. アリア (テノール)

さあ 怯えよ、
あまりにも安心しきった魂よ！
考えよ、この罪のくびきが
どれだけの数が自分に相応しいか。
神の寛容は 鉛の足で進む、
それによって 後のおまえへの怒りは一層激しくなるのだ。

6. Rezitativ (Alt)

Beim Warten ist Gefahr;
Willst du die Zeit verlieren?
Der Gott, der ehemals gnädig war,
Kann leichtlich dich vor seinen Richtstuhl führen.
Wo bleibt sodann die Buß? Es ist ein Augenblick,
Der Zeit und Ewigkeit, der Leib und Seele scheidet;
Verblendter Sinn, ach kehre doch zurück,
Daß dich dieselbe Stund nicht ende unbereitet!

6. レツィタティーフ (アルト)

待っている間にも 危機はあるというのに、
あなたは時を費やしたいのですか？
かつて 恵み深かった神も
あっさりと あなたを裁きの席に連れて来るかもしれません。
どこに 悔い改める時が残っているでしょう？その瞬間は、
時と永遠、体と魂をより分けます。
盲目な思いよ、ああ どうか戻ってきなさい、
その時が 備えのないあなたを終わらせてしまわないように！

7. Choral

Heut lebst du, heut bekehre dich,
Eh morgen kömmt, kann's ändern sich;
Wer heut ist frisch, gesund und rot,
Ist morgen krank, ja wohl gar tot.
So du nun stirbest ohne Buß,
Dein Leib und Seel dort brennen muß.

7. コラール (合唱)

今日 生きるなら、今日 立ち返りなさい。
明日が来る前に、変わってしまうかもしれないのですから。
今日 元気な、健康で血色の良い人も、
明日には病気になる、そう、もしかしたら死ぬこともあるのです。
今 悔い改めずに死んだなら、
あなたの体と魂は そこで焼かれるしかないでしょう。

Hilf, o Herr Jesu, hilf du mir,
Daß ich noch heute komm zu dir
Und Buße tu den Augenblick,
Eh mich der schnelle Tod hinrück,
Auf daß ich heut und jederzeit
Zu meiner Heimfahrt sei bereit.

救ってください、ああ主 イエスよ、助けてください、
私が今日にも あなたのもとへ行って
その瞬間に 悔い改められるように
突然の死が 私を押しやる前に。
それによって私が今日も、どんな時も
自分の故郷へ向かう準備ができるように。

(対訳作成：仙台宗教音楽合唱団 若林敦盛)

『カンタータとわたし』

佐々木正利

カンタータ違い（かんちがい？）

1970年5月28日、わたしは東京は数寄屋橋ショッピングモール内の中古レコード屋「ハンター」にいた。東京芸大1年生のときである。ルネッサンスの珠玉のポリフォニー、パレストリーナをやりたくて芸大に進学したわたしであったが、賛同してくれたのが同級生で5つも年上の宮本修さんだけという現実の前に、早くも夢破れ落ち込んでいたとき、やはり同級生で3つも年上の佐藤文行さんらが、カンタータをやろうぜ、と言っているのを聞きつけ、カンタータってナンだ！？との思いが募り、しかし到底、貧乏学生のわたしが新品を買える訳もなく、しかして必然、中古レコード屋の在処をリサーチし、はてさてカンタータなるものはあるのかしらん？と半信半疑で訪れた「ハンター」。首尾はというと……、あった、あった！早速飛びついた！だがゲットしたのは、アレッサンドロ・ストラデッラという初めて耳にする作曲家の『クリスマス・カンタータ』、アルヒーフというレーベルでネズミ色のジャケット、よくよく見たら日本語がひと言も書かれていないからどんな曲かは皆目わからず、かろうじて演奏者がアウグスト・ヴェンツィンガー指揮するバーゼル・スコラカントールムということだけはわかった（ような）気がしたものだ。でも、音楽に言葉は要らない！？家に帰って針をおろしてみたら、これがなんとも素敵なのだ。軽やかで瀟洒でこころ温まるシンフォニアと、ソプラノ歌手が歌い上げる、やさしくあまい美しい旋律にこころ溶かされ、めろめろになった。

カンタータクラブの誕生

なにとはともあれ、合唱ができるなら、とクラブの立ち上げに加わったわたしは、カンタータならちょっとは知ってるよ、とばかりの自信を秘めて、暑い盛りの7月、旧木造校舎の16番教室に勇んで駆けつけた。そう、これがことし42歳を迎えた東京芸大バッハ・カンタータ・クラブの誕生である。指導者には小林道夫とかいう、なにやら世界的な音楽家をお願いできそうだとはいうが、いっこうに現れる気配はない。それどころか、かの文行さんをはじめ、誰一人としてカンタータをやったことがある人間なんていやしないのだ。まっ、いっか、合唱ができれば、さ。と、真っ先に取り組んだのが、誰が持ち寄ったのかわからないけど第39番のカンタータ。『飢えているひとには、パンを割き与えなさい』という題名を持つこのカンタータ、ストラデッラのそれとは違い、冒

頭からバッハエキスのぎっしり詰まった合唱曲を持ち、しかして歌い切るには相当骨が折れる難儀な楽曲で、合唱好きなんてうそぶいてはいられぬほど、必死の形相で取り組んだものだ。

カンタータに鍛えられる！？

なにしろテノールが一人しかいないのだ。他のパートは4～5人ずつ揃ったのだけれど、カンタータを、いや合唱をやろうなんていう変わり者テナーがいようはずもない。しかも、である。田舎でこそ目立った佐々木だが、ここは天下の芸大、各パートの一人ひとりが自分より声がデカイではないか。そうした連中数人を相手にして一人で対抗するには、さすがの佐々木も根性だけではどうしようもなく、しかして、しょっちゅう声を哽らすこととなった。カンタータクラブのコンセプトの一つは、合唱からソロを出すこと。これは昔の流儀に従ったまでであるが、逆にいうとソロも歌えるからカンタータクラブに入っても良い、という御仁がいたのも事実だ。それを思えば、最初に39番のカンタータを選んだのが誰かは知らないが、実際このカンタータはテノールのソロだけなかつたので、テノール不足を見越しての先見の妙、したたかな奴だったのかもしれない。いずれにしても、ここから約1年の間に、好む好まざるに拘わらず佐々木の喉は確実に、堅実に鍛えられていったのだった。

怪物「小林先生」登場

カンタータクラブに小林先生が登場されたのは、創部から1年近く経った2年生の初夏だったような気がする。こんな、後の運命を左右する大きな出会いのことを忘れるなんて、ナンデコッタ！？盛岡バッハ・カンタータ・フェライン（以下「フェライン」と略）の歴史を聞くなら渡辺事務局長が一番、と誰しもが思うところだが、もちろん彼とて入会前のことはわからない訳で、同様にカンタータクラブのことは蒲生ちゃん（今日のコンマス）に聞けばわかるのだが、彼もまだ入学してなかったから聞きようがない。オーボエを吹かせりゃピカイチの小畑君は1年生だったからいたはずだけど、彼もわたしと同じようにそんなことには頓着しないタイプのような気がするから、聞く気はない。まあなにはともあれ、小林先生という人は怪物であ～る、ことは確かである。

ヘフリガーのこと

それを物語るエピソード。あれはわたしが4年生のときのこと。大学院を受けるため、小林先生にレッスンをしていただくこととなり、ナンと先生のお宅に泊まり込みで待機することになった。つまりである。先生のところには、いろんな大音楽家が合わせに来るから（先生は誰しもが知る、

世界超一流の伴奏者でもあったのだ)、その合間に時間が取れたならレッスンしてあげよう、ということだった。まあ聴くこともお勉強、お勉強!! と、まず登場したのは世界的テノール歌手、エルンスト・ヘフリガー。いやでもさ、ヘフリガーは決して美声じゃないよ、とその頃のわたしたちは、生意気で血気盛んな学生ゆえ、勝手に一流歌手たちをこき下ろしていた。その実、自分ではできないくせに、テノールっていったならジューズでしょ、いやビョルリンクだよ、いやいやコレルリのh音のdim.なんて絶対この世のものじゃないよ、ってかまびすしく盛り上がる。ドイツ系っていったって、ヴンダーリッヒのセクシーな声とシュライヤーの端正なうたの前では、ヘフリガーなんて顔色なしさ、と色なししていたものだから、今から見ると汗顔の至りである。まあなにとはともあれ、そのヘフリガーが目の前にいた。彼の発声は良いのか悪いのかわからないけど、シューベルトの歌曲集『冬の旅』を歌っているのだが、その11曲目「春の夢」をなんべんもなんべんも、ああでもない、こうでもない、って歌い直しているではないか。そして驚くべきことに、我々だったなら疾うに疲れ果ててしまっているだろうに、彼の歌唱はどんどん良くなっていくのだ。正直、度肝を抜かれたものだ。しかして彼が帰った後、小林先生に聞いた。先生、ヘフリガーってすごい人なんですか、と。先生曰く、くまさん、ヘフリガーの崇高な芸術性とそれを生み出す精進をわかる声楽家になりなさいよ、ってね。

世界の巨匠たち

小林先生のお宅にいた3日間に、先生のところに合わせにきたプレーヤーはヘフリガーの他にはニコレ(オーレル・ニコレ、フルートの世界的名手)だけだったが、演奏会の打ち合わせの電話が引きも切らず、そのお相手は、ピラール・ローレンガー(ソプラノ歌手)、ハインツ・ホリガー(オーボエ)、モーリス・アンドレ(トランペット)、ピエール・フルニエ(チェロ)、ジャン・ピエール・ランパル(フルート)といった錚々たるメンバー。そういえば、先生、この年にカラヤン指揮のベルリンフィルとバッハのチェンバロ協奏曲を共演なされ、またディートリッヒ・フィッシャー＝ディースカウの伴奏者も務められていたことを思い出し、怪物君の家で3日も寝食をともにできたことの尋常ならざる事態に、あらためて身震いしたものである。

小林先生と天才仲間

とはいっても、かく言う話は夢物語の範疇か。わたしにとっての「先生の存在」の現実感、わたしがどうあがいたって敵わないと認める、天才の小畑や蒲生、雅明(鈴木雅明)や田崎(瑞博)が、小林先生の前ではふつうに、しかし対等に見えたってことにつきる。これって実はすごいこと。

なぜなら、わたしのような遅咲きの鈍才からしてみれば、小畑たちの能力はこの世のものとは到底思えず、しかしそうした御仁を先生は平気であしらい、ところが彼らも負けじと議論し、結局なにごともしなかったかのようにふつうに笑っているのだから、凡人はただただ啞然として立ちすくむしかなかった。一方、こうした器楽畑の天才たちと違って、わたしたちうた科の人間は晩学がゆえもあり、レベル的にはかなり遅れていたと思う。がそれでも、というかそれだからこそ、先生はわたしたちに懇切丁寧にうたの基本を教えてくれたものである。本来は、その教えをここにつぶさに開陳したいのだが、それは止めにしておこう。なぜかという、先生から教えていただいたことを語るには、紙面 50 枚は要すると思われるからである。その教えを端的に示すもの、それをあえて挙げるとすれば、今わたしが偉そうに言っている（良いだろう）こと、そして本日の演奏のすぐれた部分の 90% は、すべて先生の受け売りである、ということになるろうか。

初アリア

話を時系列にもどそう。39 番のカンタータのレッスンを受けたわたしたちは、それを芸術祭でやった後、あたらしいカンタータと当面の指導者を先生から推薦していただいた。カンタータは 78 番、指導者は西原匡紀さん（現埼玉大学名誉教授）である。1971 年に藝大院を修了された西原さんは我々のお兄さんの存在で、1971 年秋の早稲田祭で指揮をしていただいたが、ここでのトピックは、なんといってもわたしが初めてソロを歌ったということである。今でこそ、テノールの難曲アリアを若者たちは平気で楽々と歌っているが、わたしたちの時代は、発声法も様式感も確立しておらず、そしてなにより指導者が少なかったもので、どうやってアリアを歌っていったらよいのか、それこそ暗中模索のなかに、とにかく馬力でもって最後まで突き進め！ の体であった。その途中で難関があっても一か八かでチャレンジするのみ、たいていは大方の予想を裏切らずに玉砕したのだった。でも、これはわたしだけのことであって、他のひとたちは羨ましくも着実な歌唱をみせていたのだけど（私の家内などは最初から完璧に近かった・・・）。

果敢なチャレンジ

この 78 番のカンタータ『イエスよ、あなたはわたしの魂を』は、その後 1972 年 4 月 22 日に東京は世田谷の赤堤カトリック教会で行われたカンタータクラブ第 1 回演奏会でも取り上げ、更に 1973 年 3 月 17 日から行ったクラブの第 1 回東北・北海道演奏旅行（山形、盛岡、弘前、札幌）でも演奏した曲である。確かにこのなかにあるテノールのレチタティーヴォとアリアは簡単な曲ではないが、都合 6 回の演奏機会のうち、何回成功したか、思い出すとぞっとする（降り番のマネージ

ヤー山田純君と志村由美子さんは、舞台の袖で今日はくまさん、何回ひっくりかえるか賭けをしていたというから・・・)。でも、である、失敗してもめげない精神は明日への希望を見いださせる。なんべん跳ね返らされても前進していくエネルギーを、今の若者には見習ってほしいものだ（などと言っているけれど、ホントのところはテノールが他にはいなかったから、自分がやらざるを得なかっただけ。まあ結果論的にみると、災い転じて福となったかもしれない）と思っている。

4 番、93 番との出会い

さて、この『カンタータとわたし』の拙稿は、本来的には『（本日の）カンタータとわたし（との出会い）』を紹介しようとして書き進めているものだから、そろそろ主流にもどしていかなければならない。かようにして、創部して3年近くを経たカンタータクラブは、ようやくのこと、小林道夫先生の指導と指揮で演奏会を持てることになった。1972年11月27日のことである。ここからが、わたしたちOBが第1期黄金時代と懐かしむクラブの全盛期が訪れるのである。記念すべきこの日のプログラムにカンタータ第4番『キリストは死の縛めに捕らわれました』が入っている（他に39番のカンタータとヘンデルのコンチェルトグロッソ2曲）。また前述のように、翌年3月には北国へ演奏旅行（プログラムは78番とモテット6番の他に管弦楽組曲の2番とチェンバロ協奏曲の5番）を敢行し、この年の5月28日には第3回目の定期演奏会を挙行している。ここでカンタータ第93番『ただ愛する神の支配に任せる人』と45番『人よ、あなたには何が良い事であるか告げられています』を演奏し、また器楽曲として先の組曲2番とブランデンブルク協奏曲第3番をやっているのだ。さらにすごいのは、同年の12月27日にカンタータクラブはクリスマス・オラトリオ（第1部～第3部）を演奏していることである。さらにさらに、翌1974年の4月2日より中部・関西方面（名古屋、清水、奈良、大阪）に第2回の演奏旅行を敢行していることは驚きである（カンタータの131番『深き淵より、主よ、私はあなたに呼びかけます』他）。そう、1972年の暮れよりたった1年半のスパンのうちに、カンタータクラブは定演を3回、演奏旅行を2回も遂行し、まさにノリに乗っている時期であった。

102 番、161 番との出会い

1974年といえばわたしは大学院1年になった年。全盛を誇ったクラブも、いっしょに立ち上げた同級生たちがいっせいに旅立ち、残った後輩たちと火を絶やさないようにしようと懸命に工夫する時期が次に訪れていた。栄枯盛衰は世の習いとはいうが、この年の芸術祭でカンタータ第102番『主よ、あなたの目は信仰を顧みます！』をし（わたしが初めてクラブを指揮した記念すべきカンター

タ)、1975年の2月28日に187番『皆あなたを待ち望んでいます』やモテット3番『イエス、私の喜びよ』の定演を持ったものの、それから2年は鳴かず飛ばずの辛抱の年となり、ようやく勢い取り戻したのが1978年2月18日、待望の定演が復活してカンタータ第161番『来て下さい、甘き死の時よ』、147番『心と口と行いと生き方が』などを演奏したときとなる。まさに苦難の道であったが、しかし、この苦役の2年がわたしたちを大きく成長させてくれたことは紛れもない事実である。なぜならば、演奏委員長(俗に言う学生指揮者)はわたしが務めてはいたが、演奏会での指揮はわたしの他に李(李善銘)さんと雅明(鈴木雅明)君で分担し、また以前では楽器編成に捉われて取り上げられる楽曲に限られていたものを、足りない楽器だらけ(ある時期にはソプラノがゼロというときもあった)なものだから、逆になんでもかんでもできる(すなわち、他の楽器に置き換える)こととなり、正式な編成ではなかったかもしれないが、とにかく新しいカンタータをどんどんさらっていった、という副産物が生まれたからである。

フェラインの誕生

ところで、フェラインが盛岡に誕生したのは1977年の2月のことである。思えばこの年は、芸大に博士課程ができた年。カンタータクラブはまだ苦しい現状のなかにいたが、そこからわたしは、カンタータを研究することが自らの使命と願いであるという思いを強くし、博士課程に進んでバッハ研究をしようと決心したのとほぼ同時に、ふるさと盛岡でバッハ研究演奏団体を立ち上げたいとの朗報が舞い込んできたのだから、それはまさに天の配剤だったという他ない。その当時、盛岡までは上野から特急で7時間は優にかかり、またわたしは、自活のため横浜の高校教諭に就いてもいたので、盛岡通いはほんとうに大変ではあったが、バッハのカンタータを研究し、またその演奏実践を通してその喜びを享受したいと願うふるさとの仲間の思いにほだされ、その後4年間がんばることとなる。こうして発足したフェラインだが、自力で演奏会を持つには至らず、その初めての演奏会は1978年2月26日にカンタータクラブを盛岡に招いて行った合同演奏会「バッハの夕べ」となった。このとき、フェラインは初めてカンタータの45番に乗らせていただいたのであったが、折しもカンタータクラブもふたたび陣容が整い勢いが増し、翌1979年3月14日からは東北・北海道への第2回目の演奏旅行(仙台、函館、札幌)を敢行していくのである(演目はカンタータ21番『私には多くの憂いがありました』、182番『天の王よ、歓迎します』、イ長調ミサ、マニフィカト等)。そして1980年2月24日に東京で、そして同じプログラム(ト短調ミサとカンタータ80番『私たちの神は堅固な城』等)で、盛岡でフェラインとの2回目の合同演奏会を開催できたのを見届け、その後わたしはドイツへ旅立っていくことになった。

原点回帰 ～ 未来へ

あれから 30 余年、クラブもフェラインも大きく成長し、価値ある足跡を残し続けている。クラブからは小林先生が離れ、顧問の服部先生（服部幸三）がお亡くなりになり、角倉一朗先生も疾うにご退官、それでも現在は 80 余名を擁する大所帯で精力的にバッハ演奏に勤しんでおられる。ここ盛岡からも、わたしの実の弟を皮切りに直弟子たちが何人もクラブに所属し、彼らが全国に散らばっていわゆる孫弟子たちもクラブで活躍しているのをみて、感慨も一入である。フェラインはと目を転ずると、いつの間にやら押しも押されぬ全国区の実力を擁する合唱団に成長し、その水準の高さは万人が認めるところとなった。たった 20 人足らずの愛好家たちによって立ち上げられたフェラインが、外国の超一流の演奏家たちに信頼される合唱音楽を提供できている現実を目の当りにすると、36 年前の発足時からみればまさに隔世の感があるといえよう。しかし、フェラインの原動力はカンタータにある。フェラインの原点はカンタータにあるのだ。今日こうして、かつてのクラブの仲間とカンタータを演奏しようとしている。しかもクラブと同様に原点に立ち返ってソリストも合唱から出すのだ。わたしもあと何年できるか、何年生きられるかわからない。でも生あるかぎり、からだが動くかぎり、原点であるカンタータクラブの精神を忘れずに音楽を続けていこうと思う。孫の代が独り立ちできるようになるまでは。最後に、カンタータクラブの出発点となった小林道夫先生がご指導、指揮された初めての演奏会のプログラムに、顧問であられた服部幸三先生が寄せられたメッセージを以下に掲げて拙稿を閉じよう。

『東京芸大カンタータ・クラブの公演によせて』

服部幸三

東京芸大カンタータ・クラブは、同大学音楽科有志の人達を中心に、器楽科や楽理科の人達も加わり、バッハ演奏の権威である小林道夫氏のご指導を受けて、熱心に学んでいる団体です。この団体の演奏を聞き、メンバーのひとりひとりと話すたびに、プロフェッショナルな音楽の世界から、こんなに次第に失われてゆく美しいひたむきさを感じます。

バッハの音楽の奥底にある深い精神的な喜びが、彼らを支えているのです。

ベートーベンはある時バッハを評して、“大きな海のような”と言いました。すべての水が注ぎこみ、また雲となり雨となって、大地をうるおす。ちょうどそのような感じをもったバッハの音楽の中で、最大の根幹をなすものは、200 曲に及ぶ教会カンタータです。カンタータを愛することを知った人こそ、真のバッハ・ファンと言えるでしょう。

（1972 年 11 月 27 日、青山タワーホールにて）

盛岡バッハ・カンタータ・フェラインの歴史

1977年に結成以来「J. S. バッハの教会カンタータの研究と演奏を通して音楽芸術を追求する」ことを目的として、これまで、36年間活動が続けてきました。主な演奏会と演奏旅行の経過は以下のとおりです。

1977年

- 2月27日 「カンタータを歌う会」として発足
- 6月28日 「盛岡バッハ・カンタータ・フェライン」に改称

1978年

- 2月26日 「バッハコンツェルト」 カンタータ 45 番、147 番 指揮：小林道夫（芸大と共演）

1979年

- 10月6日 「BACH ABEND」 カンタータ 158 番、131 番 指揮：小林道夫

1980年

- 2月27日 「バッハの夕べ」 カンタータ 80 番 指揮：小林道夫（芸大と共演）
- 12月22日 この年より「チャリティー・コンサート」を、盛岡市内のパロック音楽愛好家グループと共催（～1997）

1981年

- 7月4日 「BACH ABEND」 カンタータ 195 番、182 番 指揮：小林道夫

1982年

- 11月22日 「バッハの夕べ」 カンタータ 158 番、4 番 指揮：佐々木正利

1985年

- 3月16, 17日 J. S. バッハ生誕 300 年記念演奏会「ヨハネ受難曲」 指揮：佐々木正利
(仙台宗教音楽合唱団と合同演奏)
- 11月3日 仙台北教会宗教音楽の夕べ「メサイア」 メサイア(G. F. ヘンデル) 指揮：佐々木正利
- 11月29日 G. F. ヘンデル生誕 300 年記念演奏会「メサイア」(G. F. ヘンデル) 指揮：佐々木正利

1986年

- 4月11日 「宗教音楽の夕べ」 ドイツ・レクイエム(H. シュッツ)ほか 指揮：佐々木正利
- 4月～5月 第1回ドイツ演奏旅行 ドイツ・レクイエム(H. シュッツ)ほか 指揮：佐々木正利
- 7月11日 「東京ゾリステン演奏会」共演 スターバト・マーテル(ペルゴレージ) 指揮：赤松 安

1987年

- 3月28日 創立10周年記念演奏会「カンタータの夕べ」
カンタータ 34 番、70 番、102 番ほか 指揮：佐々木正利
- 11月27日 ムシカ・デラルテ・トウキョウ演奏会「パロック音楽の夕べ」(主催)

1988年

- 3月12, 13日 仙台宗教音楽合唱団との合同演奏会「ミサ曲口短調」 指揮：佐々木正利
- 9月17日 「今仲幸雄バリトニリサイタル」(主催)
- 11月17日 「ミヒャエル・ショッパバリトニリサイタル」(主催)

1989年

- 4月24日 「二重合唱の夕べ」 モテット 2 番、5 番(J. S. バッハ)ほか 指揮：佐々木正利

1990年

- 3月10, 11日 盛岡バッハ・カンタータ・フェライン、仙台宗教音楽合唱団合同演奏会
クリスマス・オラトリオ 4～6 部、ミサ曲へ長調(J. S. バッハ) 指揮：佐々木正利
- 10月1日 「アグネス・ギーベル 佐々木正利 ジョイントリサイタル」(主催)
- 12月～翌1月 第2回ドイツ演奏旅行 クリスマス・オラトリオほか 指揮：C. ポッペン、佐々木正利

1991年

- 3月10日 ドイツ演奏旅行帰国演奏会
モテット 1, 2 番(J. S. バッハ)他、ブクステフーデ、シュッツ 指揮：佐々木正利

- 1991 年
 10 月 14、18 日 「カンタータ第 140 番、コーヒーカンタータ」 カンタータ 140 番、コーヒーカンタータ
 指揮：H. ヴィンシャーマン、ドイツ・バッハゾリステンと共演
- 1992 年
 3 月 21 日 「バッハとメンデルスゾーンのカンタータの夕べ」
 カンタータ 93 番ほか 指揮：佐々木正利
- 1993 年
 10 月 20、24、29 日 「マタイ受難曲」(盛岡、仙台、岡山、東京)
 マタイ受難曲(J. S. バッハ)
 指揮：H. ヴィンシャーマン、ドイツ・バッハゾリステンと共演
- 1994 年
 7 月 25 日 「カンタータ 147 番」仙台バッハアカデミーにおいて カンタータ 147 番
 指揮：佐々木正利、仙台フィル・バッハアンサンブルと共演
 12 月 18 日 弘前市民クリスマス：G. F. ヘンデル「メサイア」演奏会に出演 指揮：佐々木正利
- 1995 年
 4 月末～5 月 第 3 回ドイツ演奏旅行 天地創造(J. ハイドン)ほか 指揮：ヨセフ・ツィルヒ、佐々木正利
 8 月 26 日 一関・東日本合唱祭参加 モテット 6 番ほか 指揮：佐々木正利
 9 月 26 日 鮎持清之・トリオフィオーレ「モーツァルト室内楽の夕べ」(主催)
 10 月 8 日 青山町教会チャペルコンサート 天地創造抜粋(J. ハイドン)ほか 指揮：小原一穂
 11 月 22、23 日 「天地創造」(盛岡、仙台) 天地創造(J. ハイドン)
 指揮：岩城宏之、オーケストラ・アンサンブル金沢と共演
- 1996 年
 3 月 15 日 「バッハの夕べ」演奏会 カンタータ 21、131 番、モテット 4 番 指揮：佐々木正利
- 1997 年
 4 月 13 日 20 周年記念演奏会「昇天祭オラトリオ」「マニフィカト」ほか(J. S. バッハ)
 指揮：H. J. ロッチュ、佐々木正利
- 1998 年
 11 月 20 日 「ヴィンシャーマンの口短調ミサ」演奏会 ミサ曲口短調(J. S. バッハ)
 指揮：H. ヴィンシャーマン、ドイツ・バッハゾリステン、盛岡コーロ・デラ・パーチェと共演
 12 月 12 日 「盛岡いのちの電話」チャリティーコンサート
 カンタータ 151 番、191 番、讃美歌数曲 指揮：佐々木幹雄
- 1999 年
 4 月 20 日 シュッツのダビデ詩篇とバッハ、メンデルスゾーンのモテットの夕べ
 ダビデ詩篇曲 3 曲(シュッツ)、モテット 3 番(J. S. バッハ)、モテット 3 曲(メンデルスゾーン)
 指揮：佐々木正利
 11 月 11、12 日 第 4 回ドイツ演奏旅行 ケンペン・プロブスタイ教会 ボン・ベートーヴェンホール
 ミサ曲口短調(J. S. バッハ) 指揮：H. ヴィンシャーマン、ドイツ・バッハゾリステンと共演
 11 月 14 日 インゲルハイム・ザール教会
 ダビデ詩篇曲 3 曲(シュッツ)、モテット 3 番(J. S. バッハ)、モテット 3 曲(メンデルスゾーン)
 指揮：佐々木正利
 12 月 22 日 「盛岡いのちの電話」チャリティーコンサート
 モテット、三つの宗教的な歌ほか(メンデルスゾーン)、オルゲルビューヒライン(J. S. バッハ)
 指揮：佐々木正利
- 2000 年
 11 月 23 日 クリスマス・オラトリオ全曲演奏会 クリスマス・オラトリオ(J. S. バッハ)
 指揮：H. ヴィンシャーマン、ドイツ・バッハゾリステンと共演

2001 年

- 3 月 13 日 「盛岡いのちの電話」開局 10 周年記念 チャリティーコンサート
十字架上のイエス・キリストの七つの言葉(シュッツ)ほか 指揮:佐々木正利
- 8 月 11、12 日 岡山バッハカンタータ協会主催ドイツ演奏旅行に有志(24 人)同行参加
ライプツィヒ・聖トーマス教会聖歌隊席、クヴェトリンブルグ・シュティフツ教会
カンタータ 39 番、102 番、158 番、モテット 6 番(J. S. バッハ)
指揮:D. ティム、ライプツィヒ・バロックオーケストラと共演
- 10 月 16 日 クルト・マズア指揮ロンドンフィル ベートーヴェン「第九交響曲」演奏会
交響曲第 9 番「合唱」(ベートーヴェン) 在京のパイオニア合唱団と共演

2002 年

- 1 月 13 日 25 周年記念演奏会
モテット Op. 29, 74 (ブラームス)、カンタータ 150 番、184 番、39 番(J. S. バッハ)
指揮:佐々木正利、東京バッハ・カンタータ・アンサンブルと共演
- 10 月 4 日 ライプツィヒ・バロックオーケストラ演奏会
カンタータ 45 番(J. S. バッハ)、グローリア 二長調(ヴィヴァルディ)
指揮:D. ティム、ライプツィヒ・バロックオーケストラと共演
- 12 月 3 日 鳴海真希子さん追悼演奏会
ヨハネ受難曲から第 39、40 曲(J. S. バッハ) 指揮:佐々木正利
- 12 月 22 日 久慈・こはくのまち第九演奏会 交響曲第 9 番「合唱」(ベートーヴェン)
指揮:石川善美、東北大学交響楽団、久慈市民第九合唱団と共演

2003 年

- 11 月 30 日 マタイ受難曲演奏会盛岡公演 マタイ受難曲(J. S. バッハ)
指揮:H. ヴィンシャーマン、ドイツ・バッハゾリステンと共演
- 12 月 5 日 マタイ受難曲演奏会東京公演

2004 年

- 7 月 28、30、31 日
仙台宗音、岡山バッハカンタータ協会、高知バッハカンタータフェライン主催の
ドイツ演奏旅行に有志(38 人)参加
アイゼナッハ・聖ゲオルク教会演奏会、アイスレーベン・聖アンドレアス教会演奏会、
ライプツィヒ・聖トーマス教会演奏会
カンタータ 131 番、21 番(J. S. バッハ)
指揮:D. ティム、ライプツィヒ・バロックオーケストラと共演

2005 年

- 1 月 30 日 マルコ受難曲演奏会 カンタータ 106 番、79 番、105 番 マルコ受難曲(J. S. バッハ)
指揮:佐々木正利、東京バッハ・アンサンブルと共演
- 4 月 15 日 シュレスヴィッヒ・ホルシュタイン・アカデミー合唱団盛岡公演
羊飼いの歌ほか(メンデルスゾーン)、アヴェ・マリアほか(シューベルト)、婚礼の合唱ほか(ワーグナー)
流浪の民(シューマン)、赤とんぼ(山田耕筰)
指揮:佐々木正利、ロルフ・ベック
- 12 月 27、28 日 30 日 第 5 回ドイツ演奏旅行
ミュンヘン・ヘラクレスザール、グラーフィング・シュタッドプファール教会、
デットモルト・ノイエアウラ
メサイア/ドイツ語版(ヘンデル)、クリスマス・オラトリオ I~III 部(J. S. バッハ)、
交響曲第 9 番「合唱」(ベートーヴェン)
指揮:G. シュマールフス、
バイエルン州立歌劇場管弦楽団、北西ドイツ・フィルハーモニー管弦楽団と共演
-

2007 年

- 1 月 28 日 ヨハネ受難曲演奏会 ヨハネ受難曲(J. S. バッハ)
指揮: H. ヴィンシャーマン、東京バッハ・カンタータ・アンサンブルと共演
- 6 月 3 日 飯塚子・佐々木正利ジョイントリサイタル(主催)
- 12 月 21 日 盛岡市民文化ホール開館10周年記念 マーラー「復活」演奏会
合唱団として出演した「復活公演祝祭合唱団」に有志98人が参加
交響曲第2番「復活」(マーラー)
指揮: 飯森範親、東京交響楽団と共演
- 12 月 23 日 台湾「クリスマス・オラトリオ」演奏会 長榮交響楽団: 主催
仙台宗教音楽合唱団、岩手大学合唱団と共に有志(25名)が参加
クリスマス・オラトリオⅠ～Ⅲ部(J. S. バッハ)
指揮: G. シュマールフス、長榮交響楽団と共演

2008 年

- 6 月 1 日 珠玉のカンタータ ～バッハからの贈り物～
カンタータ18番、187番、78番、182番(J. S. バッハ)
指揮: 佐々木正利、東京バッハ・カンタータ・アンサンブルと共演
- 12 月 30、31 日 スイス演奏旅行
合唱団として出演した「2008 スイス・ジルヴェスター祝祭合唱団」に有志(39名)が参加
チューリッヒ・ヤコブ教会、バーゼル・クララ教会
マニフィカト(ブクステフーデ)、カンタータ(テレマン)他、シュッツ、賛美歌等
指揮: 佐々木正利

2010 年

- 1 月 31 日 リリング・ロ短調ミサ盛岡公演 ミサ曲ロ短調 BWV232(J. S. バッハ)
指揮: H. リリング、オーケストラ・アンサンブル金沢と共演
- 10 月 11 日 花巻温泉チャペルコンサート 指揮: 佐々木正利
- 12 月 25 日 東フィル・第九演奏会 交響曲第9番「合唱」(ベートーヴェン)
指揮: D. エッティンガー、東京フィルハーモニー交響楽団と共演

2011 年

- 6 月 19 日 東日本大震災の犠牲者に捧ぐモーツァルト・レクイエム演奏会
交声曲「主よあわれみ給え」より(大中寅二)、モテット2番(J. S. バッハ)、
レクイエム・ニ短調(モーツァルト)
指揮: 佐々木正利

2012 年

- 2 月 12 日 35周年演奏会 イタリア・バロックの煌めき
キリエ、クレド、マニフィカト(ヴィヴァルディ)、主を誉め称えよ(コレット)
ミサ曲イ長調(J. S. バッハ)
指揮: 佐々木正利、東京バッハ・カンタータ・アンサンブルと共演

なおこのほかにも、クリスマス・チャリティーコンサート、チャペルコンサート、合唱祭、新春コーラスコンサートなどに参加、出演しています。

合唱出演者

【ソプラノ】

青瀧 憲子 ●赤塚 温子* ●阿久津 巴* 磯沼 佳世 板宮 渚 ○梅木 奏美 大矢 克子
 岡野美映子 岡部いずみ 加藤 真香 金成 佳枝* 菊地明日香 菊池 澄子 熊谷沙也加
 熊谷 充代 昆 千晶 昆野 志穂 斎藤 純子 柴 絵梨奈 高橋みずき ○田中 結香
 千田 絵未 千葉愛利紗 中関 彩花 中村 美咲 奈良めぐみ 三原 佳織 本良いよ子

【ア ル ト】

○一守奈那子 ○岩渕 絵里 及川 慧子 ★小川 暁美 小川 暁子 小野寺洋子 ●柿崎 泉*
 金子 千鶴 桐原 絹子 小坂 文代 佐々木美智子 佐藤 公 新宮 央子* 鈴木 英美
 高橋 知子 ●田口千紗都* 多田 蘭子* 外崎 麻子 野澤安里彩 原 穂波 平井 良子
 本田 奏子 牧野 起奈 三宅真佐子 茂木 容子 吉田 智穂 渡辺しをり 柴田 映子 G
 吉岡 英子 G

【テノール】

○伊藤 陽平* 太田 穎則 小川 隆弘 小山内 薫 鏡 貴之* 加藤 進也 加藤 照道
 ★佐々木幹雄 中野 奏保 ◇新山 隆健 ●西野 真史* 沼田 臣矢 ○堀川 佑也 三原 正敏
 ●吉村 哲

【バ ス】

赤塚 貴史 宇津野智成 小野 浩平 ○小野寺雄紀 ★小原 一穂* ○小菅 悠樹 笹島 正豊
 ●佐藤 和久 佐藤 玲央 高橋 剛 高橋 聡 田沢 隆 田村 高幸 千田 敬之*
 角掛 裕喜 遠山 徹 芳賀 郁夫 長谷川亮介 渡辺 信之 成田 丈二 G

指揮者：佐々木正利

★ コンサートマスター / ミストレス

◇ アシスタント・コンダクター

* 声楽ソリスト

伴奏者：平井 良子

● パートリーダー

○ サブパートリーダー

G 仙台宗教音楽合唱団

《実行委員会メンバー》

役 割	氏 名	役 割	氏 名
チーフマネージャー	渡辺 信之（印刷担当）	バックヤード統括	茂木 容子
サブマネージャー	堀川 佑也（共演・楽譜担当）	V I Pアテンド	多田 蘭子・小野寺雄紀
学生リーダー	小菅 悠樹（P R 担当）	ケータリング	原穂波・昆千晶・熊谷沙也加
学生サブリーダー	猪狩 裕海（チケット担当）	ステージマネージャー	田沢 隆・中野 奏保
特別会計	千田 絵未・本田 奏子	フロント	赤塚 貴史・鈴木 勇二ほか
チケット	渡辺しをり・野澤安里彩	レセプション	小山内 薫・高橋 剛
チラシ・プログラムデザイン	新山 隆健・小澤かおる	録音・編集	I B C 開発センター
共演・楽譜	野澤安里彩	宿泊協力	ホテルメトロポリタン盛岡
共演旅行手配・アンケート	青瀧 憲子	プログラム印刷	三澤印刷

以呂波耳本へ止
千利双流乎和加
餘多連呂津孫那
良年有為衆於人
即万計テ己不天
阿佐伎喰又美乙
恵比毛勢須



MISAWA

盛岡市蛇屋町15-17
TEL 019-622-9089

会 員 募 集

盛岡バッハ・カンタータ・フェライン
では、会員を募集しています。合唱が好
きな方、年齢、経験問わず歓迎いたしま
す。お気軽に見学にお出てください。

◆練習日時：毎週火曜日 午後 6:30-9:00
毎月1回日曜日午後 1:30-5:00

◆練習場所：内丸教会
(盛岡中央郵便局から与の字橋方向へ、
一つ目の信号手前右側角)

◆お問合せ：TEL 019-665-1614
E-mail mail@mbkv.jp
Web http://www.mbkv.jp/

次回演奏会の予定

2013 年 11 月 4 日(月・振替休日)

盛岡市民文化ホール(マリオス)大ホール

指揮：佐々木正利

合唱：盛岡バッハ・カンタータ・フェライン
仙台宗教音楽合唱団

ピアノ伴奏：平井良子
東浦綾郁

ブラームス作曲

ドイツ・レクイエム 作品 45
Ein deutsches Requiem

(チケットは9月発売予定)

